

## 歌手

第一章 歌手への憧れ .....	1
第二章 虚像.....	4
第三章 欠点.....	7
第四章 学校への反発 .....	9
第五章 中学.....	12
第六章 高校.....	15
第七章 都会への脱出 .....	18
第八章 最後のチャンス.....	21
第九章 オーディション .....	24
第一〇章 東京 .....	29
第十一章 残念旅行.....	32
第一二章 夢の実現 .....	34
第一三章 デビュー .....	36
第一四章 生活 .....	41
第一五章 成功 .....	44

## 第一章 歌手への憧れ

【子ども時代】私の名前は裕由。とはいえ他人は私のことをそうは呼ばない。戸籍上には私の名前として別の言葉が記されている。しかしその名前は私がつけたものではなく、私の与り知らぬところにつけられたものだ。だから私の名前は裕由である。何と爽やかで奥深く知的そして魅惑的で響きのいい名前だろう。紙に私の名前をひたすら書き続けたこともある。

六月十九日に生まれた。星座は双子座で、血液型はO型である。京都府福知山市で生まれ、市内の団地で育った。産まれた時から声だけは大きく、一旦泣き出されると、耳鳴り

がするくらいだったと親が言っていた。また、何でも見たい、知りたい、触りたいと好奇心の塊で目が離せなかったとも言っていた。

福知山は京都駅から特急で約二時間のところにある。都会ではないが、全くの田舎でもない、のんびりした街だった。京都府と言っても、府外の方が京都に対して抱く千年の都のイメージとは全く異なる。

盆地のため周りは山に囲まれていて、自然がいっぱいあった。無風の日には青空は高く深く澄み渡り、穏やかな陽光を地上に注ぎかけてくる。夜空には何千、何万もの星が輝く。大気と水が親和しており、酸素をたっぷり含んだ空気は実に清々しい。風は幼児の肌にも優しく、顔で風を感じるのが心地よかった。今での風と風のある季節が好きである。

春には様々な花が一面に咲き誇る。冠のような花や釣鐘のような花や鍵のような花が美しさを競い合い、花びらの香りをかいだり、触ったりして飽きることがなかった。植物にとってよい環境は昆虫にとっても同様で、蝶や蜂や羽虫が花や草の周りを飛び交う。蜂の羽は鋭い午後の陽光を受けてガラスのように光っていた。寝転がると、自然の音たちが私を包み込んでくれた。

稲刈りの時期には田んぼは黄金色に輝き、涼やかな空気を吸い込むと肺まで洗われる心地がする。冬には雪が降り積もり、家々は粉砂糖にくるまれたようになる。朝は黒土を押し上げる霜柱や水溜りに張った氷を踏む楽しみを満喫していた。夢中になって踏みしめた霜柱の、サクサクという崩れる音は、アスファルトだらけの都会ではすっかり懐かしい響きになってしまった。畑の中にはポツンとイノシシの檻があり、子供心に「怖いなあ、大きいなあ」と思いながら興味津々で見に行った。

少し奥に歩を進めると、里山の昔ながらの牧歌的な風景が広がる。木の葉に埋もれた、湿った土の匂いに満たされ、鬱蒼と生い茂る竹林や年輪を感じさせる大木に遭遇する。恐らくは太古の昔より繁り続けてきた木々だった。谷には青々とした草が生い茂り、草木の香りが漂っている。奥に行くに従って鳥の鳴き声も多くなる。春から夏にかけては新緑が鮮やかで、秋には紅葉が燃える。深山を思わせる渓谷には清流が流れ、四季折々の自然の景観を満喫することができる。

しかし外で遊ぶのはあまり好きではなく、特に砂遊びのような汚れることが嫌いだった。家の中で、一人で塗り絵をするのが好きだった。おままごともしたが、小さいながら「ぜんぜん面白くないなあ。でも、こんなもんかな」と思いながらやっていた記憶がある。ちょっと「おマセさん」だったと思う。母の化粧道具を勝手に使って怒られたこともあった。

【母】私に影響を与えた大人は母であった。今でも「尊敬する人は誰ですか」という質問を受けたら、迷わず母と答える。母は女手一人で私と妹を育ててくれた。母子三人で身を寄せ合って厳しい世間の風を避けていた。そこは社会から隔絶された母子の小宇宙であった。

父は私が六歳の時に急逝した。父は二十九歳で体の異常に気付き、癌と宣告されながら、

安らかな死が訪れるまでの一年間、身を引き裂くような激痛に一人で耐え抜いた。病魔に侵されながら、愚痴もこぼさず、ひたすら苦痛に耐え続けた。

母は愛情に溢れていたが、厳しい人であった。しかしその厳しさがなければ、娘の心は父の死によって穴が開いたまま、どうにかなってしまっていたかもしれない。母は「おかん」と呼んだだけでも怒った。きちんと「お母さん」と呼ばなければならなかった。

「自立しなさい」が口癖だった。「自立した女性にならなければだめだよ。頼ってばかりじゃダメだからね」と小さい頃からずっと言われてきた。今現在、自立しているかどうかはわからないが、一人でなんとか考えているのは母のお陰である。

子供の頃は母とよく一緒に買物に行った。親が電気器具とか自分以外の人の洋服とかを見ている時はとても退屈だった。そのため、イライラして、泣き叫んだりわめいたりすることもあった。なので、デパートでは大抵母親と離れて、本屋で絵本を読んだり、おもちゃ屋で人形を眺めたりしていた。そうさせてもらえるから、デパート行くのが楽しみになった。これがずっと親と一緒にいないと駄目だったら、苦痛以外の何物でもなかっただろう。

【歌手への憧れ】物心付いた時から、歌手になりたいとずっと思っていた。きっかけは、テレビでピンクレディーが歌っているのを観たことである。それが始まりであった。

それまではテレビをそれほど見る方ではなく、ブラウン管の向こうの存在に興味を抱くことはなかった。それどころか同年代の子が皆知っている芸能人の名前でも知らないことが多かった。

しかし偶々テレビをつけていた時に見たピンクレディーは違った。歌って踊るピンクレディーの姿に釘付けになり、観終わった後も目と耳に焼き付いて離れなかった。背筋がゾクゾクし、体の中を突き通すような不思議な感覚が走った。指の先まで痺れるような気がした。津波に吞まれたようであったし、雷に打たれたようでもあった。この時に私の心の中に侵入する者がいたら、溢れ出す衝撃と感動と音楽の海であえなく溺死しただろう。

ああいうふうにもなりたい、ステージに立ち、スポットライトを浴びたい。生まれて初めてキラキラ光る喜びと欲望を感じた。欠落したものを埋めて完全なものにしたいという、心の渇きの答えを見つけることができた。強い衝動で体全体が震え、胸が燃えるように熱くなった。衝撃の花火が徐々におさまるにつれ、何とも言えない、いつまでも忘れられない気持ちになった。

この日から私の人生が始まったと言っても過言ではない。今までの人生は終日眠っていたようなものだった。これで私は生きていける、自分の人生を信じることができると子どもながら感じられた。私は歌手になるためののみ、この世に生を受けた。それが私にとって唯一の真実であり、この世に生存する理由の全てであった。

それからは何を見ても何を考えても歌手になることと結びつけずにはいられなかった。寝ても覚めても、勉強しても働いても、いつもどんな時でも頭の中を占領していた。忘れたいと思ったとしても、できそうになかった。いつまでも根強く残り、どうしてもかき消

すことはできなかった。時には表面にうっすらと灰をかぶり、見えなくなることはあっても、その灰の下で火はますます激しく燃え上がっていた。

その後に父にねだって買ってもらったピンクレディーのカセットテープは、私の宝物である。とても嬉しかったことを覚えている。当時はピンクレディーのファンではない子の方が珍しかったかもしれないが、私は熱烈だった。保育園にはピンクレディーの絵本があったが、お昼寝の時間の前は取り合いっこしながら見ていた。

今でもその時の印象は強烈である。強烈に自我を主張する人達ではなかったが、忘れたい記憶を焼き付けた。憧れのお姉さん達で、昼間は私の太陽になり、夜は私の星となったと言っても過言ではない。現在では憧れているだけではない。越えるべき目標だとおこがましくも思うこともある。

【音楽】ステージで歌っている自分を夢想するだけでなく、実際に歌って踊ることもあった。真夜中に蒲団の上で踊っていたこともあったらしい。これについては自分自身記憶にない。隣で寝ていた妹がかなり後になって教えてくれた。妹は見てはいけないものを見てしまったように感じて、ずっと自分の胸にしまっていたとのことである。

子どもの頃から家で、一人で歌って踊っている時が本当の自分になれた。私が吸う空気のように、私が浴びる日光のように、私は歌を求めている。心の底から湧き出る欲求にかられて歌い続けた。何時間歌い続けても飽きなかった。歌うことで初めて自分の中にある喜怒哀楽を放出できた。ある時は繊細にして優美に、ある時は雄渾にして壮大に歌った。歌うと気持ちが高ぶり、恍惚感をもたらしてくれる。自分の歌声に聞き惚れてしまう。

音楽は自分の世界が作れる貴重な時間である。精神の穢れを癒す無上の名薬である。周囲の雑音が遮断され、心は落ち着き、嫌なことを忘れられる。一日の疲労が日光を浴びた霜のように溶かされていく。現実逃避の面があることは否めないが、集中することで、精神的に解放される。歌うことで引力を初めとする世の中の物理的、精神的、全てのしがらみから解放された気持ちになれた。

## 第二章 虚像

【理想像】歌手になりたいという夢は誰よりも強く持ち続けていたが、一人で歌ったり踊ったりする他は、誰にも言ったことがなかったし、夢の実現に向けて具体的な行動をすることはなかった。人前で何かするタイプではないし、言葉にするのも恥ずかしかった。また芸能界のことをよく知らぬまま、芸能界に直接飛び込むのは無謀であるし、危険だと考えていた。

それでも心の中では、今の自分は本当の自分ではなく、いつかきっと歌手になれると信じていた。私に意思と才能は欠けていない。欠けているのはチャンスだった。そして空想の世界で理想的な自分を思い描いていた。春に夏に秋に冬に、朝に昼に夜に思い続けてい

た。

【光】理想の私は光だった。この地球始まって以来休まず東から登り西へ沈む太陽の光とも、電気エネルギーが発する光とも質の違う、人を癒す無垢の光。オーラと呼ばれたり、霊光と呼ばれたりもする。堅い意志をもち、内なる炎に燃えている。それは燃料を必要とする火ではなく、それ自身が燃える火である。四方八方に宝石箱を覆したような光彩を放つ。その目も眩むような明るさに、あらゆる一切の松明は消えてしまい、周りのもの全てが真っ黒なピロードで覆われてしまう。

光の中心にいたのは汚れ無き博愛の天使...一見すると小柄な少女とも見える。その存在そのものが、注目を要求する自然の力、生きている奇跡だった。生まれながらの品格で畏怖の念さえ周囲に抱かせたが、同時に無邪気に澄んだ瞳が自ずと人を惹きつけた。誰もが一目するカリスマの持ち主で、見る者の体を痺れさせ、心を押し流す。その姿から目を伏せるだけでも意志の力を総動員する必要がある。

不安と絶望の日々の中で不意に現れた天使である。最初の心はまだ崇拜心とは別の場所にあったとしても、崇拜の対象へと変化を遂げるまでに要した時間はほんの僅かだった。否、もしかすると初めて拝見した時から崇拜は始まっていたのかもしれない。天使の歌声、快活な笑い声、微笑み、博愛の精神、小柄な姿、愛らしい姿、そして祝福。それら全てを見る内に知らず知らずの内に崇拜心が芽生えていく。

幸福を振りまくために遣わされた存在である。優しく慰められるほど、女神に思える。一緒にいるだけで魂が浄化される。そこにいてただ日々を乗り越えることができる。心も体もその足元に投げ出してしまふ。そしていつしか生きさせて頂いていることに気付く。

【美貌】容姿は自分でもうっとりする程、綺麗で、それでいてかわいげもある。色っぽくて、スタイルが良くて、シャープでキリッとしていて、セクシーである。化粧気がなくても人目を惹かずにはいられない。童顔で、実際の年齢よりも遥に若い年齢に見られる。

百人中九人まで美人と認めることは間違いない。美人と言っても様々だが、「たぐいまれな」「とてつもない」という形容詞を付けても、さほど異論は出ないだろう。歌手になろうとする人間はそれくらい自信を持っていなければならない。

微笑む姿は明るく優しく、暖かい思いやりが溢れている。怒る姿は厳しく凛々しく、どんな状況でも美しく輝いている。放心した表情でさえ美しい。夢を実現することにより、余裕という名の磨きがかかり、一層輝きが増した。

目鼻立ちは端麗で、繊細であると同時にいささかも生气に欠けるところがない。頬は艶やかで両目には生气溢れる光がある。瞳を見つめているうちに、輝きは柔らかな光となって広がり、見るものを包む。目が心の窓というのは本当である。

笑顔も輝いており、時折見せるフニャツとした笑顔はとてもかわいい。引き締まった美貌が笑うと一変して妖艶の彩りを帯び、見る者の心に春風を送る。鋼鉄も溶け、ドライア

イスも気化するに違いない。真っ白な歯は日光を受けるとキラキラ輝く。口を開くと、この歯が顔を一層明るくするようであった。

容貌が秀麗なだけに一度殺気を帯びると、表情は凄絶なものになる。眉をひそめるだけで、太陽が喪に服して雲の陰に隠れるほどである。怒気が顕わになった眼光は、ナイフより鋭く心の奥まで刺し通す。雷さえ尻尾を巻いて逃げ出し、軟弱な人ならば簡単に打ち据えられてしまうだろう。魂さえ持っていかれかねない。

掴める様で掴めない神秘的で雲のような不思議な存在であるが、現世から超越した非人間的な硬質な美貌を誇るだけではない。私の厳しい表情も、人を寄せ付けない完全無欠な厳しさではない。

体は小柄であるが、全身から放射している光は体の小ささを補って余りある。むしろ小さいからこそ才気が凝縮された塊として、圧倒的な光を照り放つ。花が咲いたようなという表現は私のためにあった。華やかな存在感があり、場の雰囲気を一瞬にして変えてしまう才能がある。

均整のとれた姿態は芸術的に洗練された造形美の極致であり、自然がなした完璧な仕事の一つである。太陽の光をいっぱいを受けて育ったと思われるはつらつとした体。宗教的な彫刻の神々しささえ感じさせる。造形の女神の寵愛を受けていることは間違いない。一度見たら誰しも忘れられないだろう。

肉体には弛みはなく、ハリのある皮膚は艶やかな光沢を放つ。ほっそりした姿は風にも折れてしまいそうな風情に見える。実際、小学生の頃、下校時に大風に飛ばされそうになったことがある。しかし、その実は凜としている。

身のこなしは柔軟で無駄がなく、およそ鈍重さを感じさせない。生まれつき身体が細身でしなやかなこともあり、所作の一つ一つが流麗で美しい。歩き方一つをとっても自信とエネルギーに満ちている。背筋と膝をまっすぐ伸ばした颯爽たる歩き方は一流のモデルを思わせる。運動神経はよいとは言えないが、踊っている時は虎のしなやかな律動美が備わる。迅速な動きにもかかわらず、流麗さが欠けることはない。

【性格】精神的にも感情的にも安心して頼れる大人の女性である。真の寛容さと高貴な心情と豊かな反省力を兼ね備えている。その一方で、時々子供っぽいところも見せる。外見は洗練されていて、粹で心遣いのこまやかな人柄だが、清楚な一面もある。理知的であると同時に、それを忘れさせるほどの物腰の優雅さが人目を引く。満場の注目を一身に浴びていても、持ち前の優雅さは失わない。偉大な人格というものには周囲に光を投げかけるものである。

話は溢れる情感や鋭い洞察力に裏打ちされて上手く面白く、当意即妙の話術で周囲を魅了する。桜色の唇から飛び出す軽妙な言葉は、人々の胸に強く訴えかけるものがあつた。天気が良いとか悪いとか、機嫌が良いとか、当たり障りのない話とは違って、打てば響くような返事が即座に返ってくる。賢くて機転がきくが、少しだけ常識を知らないところも

魅力である。つつこみ役のことが多いが、たまにぼけてしまうこともある。

一方で全くしゃべらなくても注目されてしまう独特のオーラを展開する。必要があれば第一級の雄弁家になれるが、場合によっては一言一句を口にするにも、よく考えて決して軽率に話すことをしない。憶測でものを言うことはない。うっかり口を滑らせた一言が争いの火種になりうることをよく心得ている。

【声】私の声は透明感があって、それでいて温かみがある。透明感のある声というのは氷のように冷たい印象を与えてしまうこともあるが、この声は心地よさを与えることができる。心の琴線に触れる声である。話の中身よりも、声さえ聞いていけば安らかに守られている気持ちになれる。ささやくように話しても、遠くの人にも明瞭に聞こえる。

歌声は生を悦ぶ鳥のさえずりである。歌うと鶯が悔しがって木から落ちるほどである。歌声が空気を震わせると、温かい液体が喉を通り、胃に入り、体を芯から温めてくれる。温かい歌声に包まれると、不安も恐れも消滅し、代わりに勇気と希望と断固とした決意が込み上げてくる。

「自分に一番自信のあるところはどこですか」と聞かれて、ナルシストな人は「見た目」と主張するだろうが、私は違う。確かに私は容姿も端麗ではあると思っているが、やはり自分自身、最も自信のあるところと言えば声であり、歌である。歌っている時が一番輝いている。私に遺伝した美声こそは芸能界に出したとしても一、二を争うくらいにレベルが高いと信じて疑わない。

歌もダンスも演技も上手で、かっこいい。本当に歌を愛していて、歌うのが好きで、そして聴き手に愛情を分け隔てなく注ぐ。聴き手が知らない曲でもしっかりと聴かせることができる。

要するに、これまでどこにもいなかったようなアーティストである。「そういう世界もある」というものを作っている。

### 第三章 欠点

【欠点】私には欠点も弱点もある。そして私は自分の欠点にも弱さにも誇りを持っている。それらが私を作っているからである。それは理想像においても同じである。弱さも狡さも情けなさも全てがありのままの自分と受け入れている。理想の自分を空想することは現在の自分を否定することではない。現状に不満があったとしても、本質的に自分は好きである。自分が好きにならなければ誰も好きにはならない。欠点も含めて自分が好きなのである。

自己愛が強く、自意識が異常と思えるほど肥大化していた方が歌手には向いていると自分を慰めている。芸能界で生き抜くためには、自我を肥大化させないと、やって行けない。一般社会での感覚だと、「なんだコイツ」という感じになる。

万人に愛される性格でないくらいでちょうどいい。自分の仕事に誇りを持つためには、どうしてもそういう点が必要になる。アーティストに限らず、職人さんも頑固・偏屈な人が多い。才能がある人ほど反骨精神や批判精神も余計に持つものである。結局、凡人の集まりである大衆社会の中で個性を貫くために生じる副作用なのである。

【表情】私が自覚している欠点は嫌だと思ったらすぐに顔に出てしまうことである。つまらないと思った時、怒った時も顔に出てしまう。表情に出るといふより、むしろ無表情になる。だから、顔に出やすい分、「ちょっと抑えなきゃいけないかな」と思うこともたくさんある。

美人にありがちな厳しい表情をしていることが多い。写真を見返しても、普通の状態でもきつめの表情になっている。人見知りで緊張することが多いため、そのような表情になってしまう。しかも目つきが見方によっては、他人を見下すようにも見えてしまう。視力がそれほど良くないために、このような目つきになってしまうのだが、それでかなり損をしている。怒っていないにもかかわらず、「怒っているの？」と聞かれたこともある。

【冷たさ】気が強そうで、キツそうな性格に見えるが、実は泣き虫である。言葉や仕草の端々に繊細な面が見られる。怒る時は怒っていいし、泣く時は泣いていいが、普通の自分であることが一番大事である。意図して自分を低めることで媚態に努めることはしない。

他人に対しては冷たくなってしまうこともあるが、親しい人には気さくで優しくなる。面倒見が良くて頼りがいのある姉貴分を演じることも多い。仲良くなった人から「明るいんだね」と言われたこともある。最初は暗い人と思われていたようである。

私にも人に優しくありたいという気持ちは月並みにある。小学三年生の頃、同じクラスの子が消しゴムを落とした時に、「落ちたよ。ハイ」と拾ってあげたこともある。楽しくもないのに笑うことを学んでもいる。嫌われない為に、笑顔を作ったり、ごく自然に条件反射のように振舞ったりするのが社会のルールであることも知っている。

しかし「いい人だね」と言われたいわけではない。だから、自分が正しいと思ったことをしたり言ったりして、それで私のことを嫌いとか、怖いと感じる人がいても、それは仕方がないと思う。感情を押し殺すのが大人の世界でも、不満は口に出して言わないと全く伝わらない。好かれたいために努力するつもりはないし、皆に「優しい」と思われるのは絶対無理である。現存する俗物を全て愛さねばならぬというのは無茶である。

【人見知り】人と一緒にいると、人一倍ストレスを感じてしまう。人が大勢いるだけで、「うわっ、人が多いの苦手やなあ」と思ってしまう。人から圧迫感を受けてしまうのである。

人間嫌いというわけではなく、むしろ寂しがり屋なくらいだと思っている。実際、私に友人が少ないのは、友人を選ぶ趣味が私にあるわけではなく、相手から近寄ってこないだけであり、相手の方から親しんでくれれば、私が拒否することはない。

知らない人と関係を作るのが下手である。元々、人見知りなところがあり、初対面の人に特に自分から話しかけたりしない。聞かれたことには答えられるが、自分から積極的に語るということをしなかった。向こうから寄ってこない人には自分から歩み寄ろうとしなかった。

自分を飾ったり、でしゃばったりしない分誤解されやすいところがある。誤解されていると知っても自分からは誤解を解こうとしない。価値観や精神的な波長の異なる人々に自分の思考を理解させることは面倒である。

知らない人の中では借りてきた猫のように大人しくなる。完全な受け身になってしまい、自分を出せない。もじもじしていて常にうつむき、目が合うとそらしてしまう、そんな状態だった。

【誤り】間違ったことをした時は、自責の念から、自分でやってしまったことに悔やみ、何とかしようと思ひ、状況をより悪くしてしまうことがある。きちんとしようとしすぎて、逆に泥沼にはまってしまう。どんどん沖に向かってボートを漕いでいってしまう。取り乱して、より傷口を広げてしまうのも、ピュアな性格から来る人間的魅力と思う。

しっかりした倫理観を持った人であればあるほど、後になって後悔して、苦しむことになる。私は小学生の時、友達に口喧嘩して「死ぬ」と言ってしまったことがある。それで、先生にこっぴどく怒られた。その時は「アホ」とか「マヌケ」とどこが違うのかと思ひ、不満だったが、今では、当時の自分の短慮さに、胸がチクチク痛む。

## 第四章 学校への反発

【学校生活】私は歌手になるために具体的な行動を起こすことなく、それを自分の幼さで正当化して、同年代の子どもと同じように小学校に入学した。

歌手になりたいという思いだけで生きてきた私にとって、学校生活は楽しいものではなかった。学校が歌手になることに結びつくとは思えなかったため、行っても仕方がないと思っていた。夢に没入していた私にとって、そこはイライラしてくるくらいに無価値な世界であった。

学校では全く異なる文化を手探りで進んでいるようなものだった。ほとんどの環境に適応できることが人間の強みとする見解もあるが、適応できるからといって好きだとは限らない。現在でも学校にいい思い出は少ない。懐かしさを覚えるよりも、嫌な記憶が呼び起こされる不快感の方が強い。過去の醜い自分の姿を見せ付けられるような気持ちになる。お呼びがかかること自体がそれほどないが、同窓会に出席することもまずない。

学校では結局のところ、じっと座って話を聞くことを学んだに過ぎない。しかしそれが苦痛だった。聞いている振りをしつつ、ノートに落書きして時間を潰すこともあった。この癖は就職してからも治らず、ミーティング中に配布された資料の余白にドラえもんを落

書きすることもあった。朝礼などの長話も苦手だった。校長先生が話をしている時に、一人だけ落ち着かず、痒いところ掻いたりしていた。ランドセルを忘れて学校に行ってしまったこともある。学校に着くまでランドセルがないことに気付かなかった。

学校での私は生気がなく、退屈しきっていた。先生や同級生に馴染めず、うまくやっていけなかった。友達と寄り合って何事か話し合う子供達、静かに本を読んでいる少女、取っ組み合いを始める男子達。その中にぼつりと一人いただけだった。日がな一日、顔を伏せて虚ろな目をして過ごしていた。皆が陽気に騒いでいる最中でも、詩人を想起させるほど沈んでいた。

私の目には同級生が珍しい人に見えた。皆、いっぱい喋っていた。しかし私には「なんでそんなに喋ることがあるんや」と不思議で仕方なかった。そして挨拶や普通の会話にしても必要以上には話さなかった。

いつもつかかってくるライバルが実は自分のことを誰よりも心配していたとか、いつも必要最低限のことしか言わない先生が実は自分のことをいつも見守ってくれていたという、フィクションならばありがちな汗と涙の感動のドラマも皆無だった。

【集団主義】集団行動を押し付ける特殊日本の教育システムに反発を覚えたのは言うまでもない。凡愚は異能を恐れ、高慢な奴だと潰しにかかるのが閉鎖的な日本社会の常である。できるかぎり自由を謳歌したいのに、周りが許してくれなかった。私にとって学校は自由を及びもしない贅沢だと諦めさせるような存在だった。言われた通りに行動し、「ああ楽しい」で済んでいれば楽だっただろう。

幼稚園の頃から皆で一緒に何かやるのが恥ずかしくてできなかった。「これはやりたくない」とか「私はこうなの」とか、好き嫌いがはっきりしていて我が強く自己主張する子どもだった。何をする時でも自分で決めないと気がすまなかった。他人に説得されるような人間ではなく、あれこれ指図されるのが嫌いだった。たとえ正しいことでも、他人から押し付けられるのは好きではなかった。そのくせ自分の意見を人に説得的に伝えることは下手だった。親には今でも「育てにくい、やりにくい子やった」とよく言われる。

同級生にも言う時はハッキリとものを言うから、私のことを怖いとか、意地悪と思う子もいたかもしれない。ストレートに表現してしまい、相手を傷つけたり、中傷ととられたりして、失敗したこともある。男の子ともよく口ゲンカして、先生に「みんなと仲良くしなさい、みんなに優しくしてあげなさい」と怒られてばかりいた。説教は馬耳東風だったが、親にもたくさん心配をかけてしまった。誰も味方してくれなかったし、誰も認めてくれなかった。

だから実は学校では人より余計に我慢を重ねていた。緊張すると言いたいことが言えず、後で悔しい思いをしたこともある。友達は誰もそのようには評価していなかったとしても、子どもの頃は自分で自分を抑えるタイプの人間と思っていた。

精神的にはピリピリしていて、緊張が限界を越えると腹痛という現象になって現れ、学

校を休むことになった。しかし親が欠席の連絡を入れた途端、腹痛は治った。中学高校になっても欠席は多く、担任が家に来たこともある。当世風に表現するなら、軽い引きこもりだった。

歌手になりたいと思うくらいだから、目立ちたいという思いもないわけではない。勿論、歌手になりたいのは純粋に歌が好きだからであるが、有名になるという俗な動機も皆無ではない。しかしあらゆる分野で傑出しようとか、万人に認められようという気持ちはなかった。

観客の拍手喝采を浴びるためなら、舞台の上の炎の輪を飛びぬけることも辞さない類の衝動的な虚栄心は皆無だった。それはアーティストではなく、エンターテイナーの属性である。私は私のやりたい分野を極めたい、それだけだった。そして学校はその場所ではないと感じていた。

【体育嫌い】まだ小学生の頃は無邪気で、友達と遊ぶことも多かった。昼休みは鬼ごっこにはまっていた。足が遅かったので、よく捕まっていた。小川でザリガニとか沢ガニをとって遊ぶこともあった。背が伸びるように鉄棒にぶら下がっていたこともあった。

しかし運動は苦手で、体育も運動会も真面目にやったことなかった。体育教師は、木陰を好む人の目に激しい光線を当てたり、休息を愛する優しい人の耳に大砲の轟きを響かせたりすることが趣味の人種としか思えなかった。

運動神経は努力より素質だと思っており、最初から放棄していた。照れくさくて、全然一生懸命になれなかった。だから運動会の写真を見ても、笑っている顔がない。幼稚園の運動会では泣いていた。弁当を食べている時にだけ、楽しそうな顔をしていた。

サッカーもバスケットも、嫌でたまらなかった。三十分で足がパンパン、一時間で足がプルプルいいはじめて大変だった。バレーボールはすぐに腕が痛くなった。自分のチームが勝とうが負けようが全く興味が持てなかった。他の人がどうしてゲームの勝ち負けに熱くなれるのか不思議だった。

ボールが自分のところに飛んでくると、小鳥が物音を聞いた途端に飛び去るように、逃げ出した。なるべく目立たぬようにして、ひたすら試合時間・授業時間が過ぎ去ることを念じていた。チャイムが鳴ると、これで苦行から解放された、という安堵の思いでいっぱいになった。

今の小学校では子どもの気持ちを考えて、徒競走をやっても順位は付けないようにしているところもあると聞いて、教師も少しは子どもの痛みが分かるようになったと実感している。保守的な大人はそのような教育方針に批判的なようだが、運動会は好きでもないのに全員が強制的に参加させられる。だから好んで参加したわけではない子ができるだけ嫌な思いをすることがないように配慮するのは教育者として当然のことと思う。運動能力のある子は運動が苦手な子と一緒に走って勝って喜ぶというような低次元な楽しみを享受せずに、地区大会でもオリンピックでもどんどん参加して、能力を伸ばせばいい。

体育を益々嫌いにした理由に私の通っていた小学校の迷惑な教育方針がある。学校では健康に良いという理由から、グラウンドでは裸足でいさせられた。教室に戻る時に足洗い場で洗うのが慣わしであった。砂や石を直接足の裏で踏むため、足が痛くなるだけでなく、衛生面も悪そうで嫌だった。足を地に付けるという意味と大地の息遣いを感じるというイメージは素晴らしいし、プールの時は裸足で気持ちいいと感じることはある。しかしグラウンドがそれに相応しい場所とは思えなかった。

## 第五章 中学

【中学】中学の頃は男友達という方が多かった。性格が男っぽいからかもしれないが、男子という方が気楽だった。気軽に話し合えたし、何より楽だった。男っぽい性格のせいかな、普段は自分のことを「私」と言うのに、興奮すると「俺」と言ってしまう。人に見せる強気な自分が「俺」なのである。これは今でも直っていない。

しかも流すのが苦手で、真正面からやり合ってしまうタイプだった。性格的に真正面から自分の意見を言うことしかできなかった。攻撃を受けたら、本能的にそれを跳ね返していた。自己の尊厳が脅かされるや、途端に頭に血が上り、無理にも正さないでは始まらなくなる。だから迂闊に戦いを挑んでくる者は痛烈なお返しを受けることを覚悟せねばならなかった。

上級生に対しても、苗字の後に「さん」付けする以外、ほとんどタメ口だった。鶏の群れには激しい上下関係があることは知っていたが、学校もある意味、鶏の群れであることに気付かなかった。後輩に対しても、「これはこうでね、ああなんだよ」と優しく言えばいいのに、ドスのきいた声で「ちゃんとしいや」という言い方をしてしまう。

横柄な態度のせいで嫌われ者になってしまったこともある。気付かないわけでもなく、気にならないわけでもなかった。それでも折れる気はなかった。

【管理教育への反発】中学校では集団主義のみならず、管理教育まで徹底された。田舎の学校では校則で髪の毛や制服、靴下、靴、放課後の行動等、事細かに定められていた。そのような生徒を縛り付ける管理教育には、反発する気持ちが強く、頻繁に校則違反をしていた。権威に対し、それが権威というだけで従う気は皆無で、自分の倫理観と合致しなければ従うつもりはなかった。

また、教師から、していない悪事までしていると責められていた同級生を庇ったこともあった。腕組みした姿勢や腰に手を当てた姿勢という、どこか偉そうな格好をする癖があった上に、派手好きだったため、見た目は、怖そうな姉ちゃんに見えたかもしれない。

そのため保守的な教師から素行が悪い、不良とレッテルを貼られたこともある。何しろ学校と家を往復する以外の道順を知っている生徒は全て不良と決め付けるほど頭の固い教師だったから無理もない。

しかし喫煙、シンナー、暴力行為、バイクでの暴走行為、器物損壊行為というようなことは、間違ってもしなかった。傷つけられない限り絶対に相手に牙を向けることはなく、人を傷つけることは断じてなかった。特に煙草は歌手を目指す以上、吸わないだけでなく、受動喫煙もできる限り避けていた。

人の物を壊したり、夜中にバカ騒ぎしたりするのは、元々誉められたものではない。「こんなこと、やってのけるのは、俺しかおらんだろう」と思ってやる阿呆もいる。しかしそのようなことは恥ずかしいし、アホらしいし、やっても誰も誉めてくれないから、誰もやらないだけで、やること自体が難しいわけではない。たとえ面白おかしことだとしても、それは自分を辱めることでしかない。その辺を完全に見誤っている。

とはいえ法律や条令を盾に、厳格に取り締まったり補導したりするのは窮屈であり、反感を覚える。公道で大道芸が出来るようにライセンスを発行するのも本末転倒な話である。ああいうものこそ、公の許可云々とは最も離れた所で行われるべきものである。「東京都から免許を受けた大道芸人」の去勢された芸は見たくない。

自由が原則で、それでは不都合が生じる場合に例外的に制限をかけるのが、本来の姿である。しかし権力を持った大人の話の聞くと、制限するのが原則であるかのような主張である。人間は権力を握ると酔ってしまう。私も小さい世界では経験あるため、よく実感している。

【平和教育】学校教育で印象に残っている数少ないものの1つに小学校以来の平和教育・戦争教育がある。私が暴力を嫌う背景にはこの平和教育の影響がある。国家のために人を殺すのは悪徳の極みであり、大義名分で粉飾する点がこの上なく醜悪だと思っている。

侵略の恥部を隠蔽し、戦争を美化しようとする反動的傾向が強まりつつある現在と違い、当時はまだ「教え子を戦場に送るな」というスローガンが健在であり、平和教育も活発であった。地域的にも京都は革新政党が強かった。特に社会科見学で広島に行った時に見た原爆資料館は忘れられない。だから子供の時は平和、戦争放棄一辺倒だった。朝鮮(韓)半島の根強い反日感情についても、豊臣秀吉や伊藤博文に侵略されていたわけだから無理もないと理解していた。

社会人になり、色々な本を読むようになった現在では、平和教育に異議を持つ部分もないわけではない。例えば戦争の加害者(侵略者)としてよりも被害者としての視点が強い点がある。東京大空襲の被害は強調するのに、実は日本軍がそれより数年前から民間人をも対象とする無差別爆撃を中国で執拗に行っていたことは知られていない。これは自己弁護と責任転嫁により正当化し、自国を被害者とする無反省な論調に力を与えている面もある。

最近、中国で行われたサッカーの国際大会で、会場になった重慶の住民から日本の選手・サポーターに強いブーイングを浴びせられたことがあった。マスメディアが現象を表面的に報道するだけでなく、その背景として日本軍による爆撃の被害があったことも伝えるようになったのは、物事を歴史的に捉えることができるようになった点でよい傾向である。

また、侵略は悪いとは言っても、誰が悪いのかという点は曖昧なままにされる傾向がある。軍部が槍玉に挙げられることがほとんどだが、軍部と絞ったところで依然として固有名詞は出てこない。一億総懺悔という論法は責任の所在を不明確にし、罰せられるべき者の罪を見逃してしまう結果となる。

他にも子供に細かい事情を教えない点、戦争(戦場)の悲惨さは強調するが人々の日常生活までも支配に組み入れてしまう植民地支配や占領支配の過酷さにはあまり触れない点には不満がある。

また、現在、自らが戦後民主主義の担い手であるかのように振舞っている政党、新聞社、知識人の多くも、戦争中は戦争反対とは一言も言わず、大政翼賛会に合流したり、大本営発表をそのまま報道したりしていたということを知った。戦後民主主義の担い手の中に、自らの過去は何ら反省せず、まるで高いところにでもいるような立場から政権を批判する欺瞞的な輩がいる以上、団結することも、主流派となることもできないのは無理がないと感じている。

とはいえ私にとって、平和教育が学校から真面目に吸収できた数少ない教育の1つであり、これが物事の考え方のバックボーンになっているのは間違いない。だから無前提に「愛国心」を繰り返されても、受け入れることはできないし、社会人になって源泉徴収表を見ると「愛国心、税金取られて敵国心」という心境にもなる。むしろ自国や民族の優越性を主張するのは自分の自信がもてない輩が自尊心を満足させるための方便と考えている。または悪党が自己の悪行を正当化するための方便としても使われている。

最近流行りの「従軍慰安婦や南京大虐殺はなかった」、「日本軍は戦争犯罪を何らしていない」という論調にも惑わされることはなかった。戦争になれば必ず虐殺や暴行は起こる。戦争というものがそういうものなのである。どれだけ軍律を厳しくしても意味はない。戦場で正気を保つこと自体無理である。自由と民主主義を国是とするアメリカでさえ、捕虜への虐待を止めることはできない。ましてや、人権観念の皆無な半世紀前の日本軍では、推して知るべし、である。

また、自虐史観という言葉も流行っているが、これも全く理に合わない。自己の犯罪を自ら糾弾するならば、自分で自分をいじめ苦しめることになるかもしれない。しかし戦争犯罪者の戦争責任を追及することは自己を痛みつけることではない。たとえその戦争犯罪者が自国の為政者であっても同じである。さもないければ同じ町に住むチンピラの犯罪を糾弾することも自虐になってしまう。自虐史観という言葉を意識する人はその時点で自己を戦争犯罪者と同列に置くことになる。

【吹奏楽部】学校でも音楽は好きだった。歌ったり、楽器を演奏したりするのは、たとえ皆と一緒にでも楽しかった。中学では吹奏楽部に入った。運動が嫌いだったし、ジャージに着替えるのも嫌だったので、文化系から選んだ。吹奏楽部では私同様、運動部の厳しい練習が嫌という消極的動機で入部した部員も少なくなかった。

私が担当したのは、最初はクラリネットをやって、それからサクスを担当した。私の小柄な体、繊細な唇から、どうしてあんなに力強い音が出るのか不思議だった。しかし、途中で楽器を替えたことから予想できるように、あまり上達せず、吹けたのは校歌くらいだった。音楽は好きでも団体行動はやはり苦手だった。

## 第六章 高校

【高校】高校には行きたくなかった。偏差値で輪切りにされるのが面白くなかった。母がよく作ってくれるイカリングのようだった。昔は海で元気に泳いでいたのに、今では輪切りにされ、ドーナツのような無様な格好に料理されてしまった。成績は平均より少し上という程度で、良きにつけ悪しきにつけ、それほど目立つ位置ではなかった。

小学校や中学校と違い、受験してまで行くのも面白くなかった。受験は、それほど価値もないもののために、余計な心配ばかりさせられるものだった。受験制度などというものは、自分達がかつて経験した苦しみを他人にも味あわせなければ気がすまない大人にとってのみ存在意義があるものと思えた。

「学校なんか行かないで歌手になるためのことをしたい」と思っていたが、きちんと現実は見据えていた。どうあがいても世の中がどうにもならないことを十分すぎる程知っていた。親の思いもあり、高校は通い続けた。今という時期は夢を実現するための貴重な一行程だと考えていた。

現実を無視するほど、子供ではなかった。夜空を見上げて夢見心地になっているだけの少女とは違い、地に足つけてひたむきに自分の夢と向かい合っていた。大きな山にあたるまでには何年も退屈極まりない仕事を地道にこなすしかない。農民が作物の実りを待つように、夢が実現するきっかけを待っていた。いずれ必ず春が来るとしても、冬場の暖房が不要ということにはならない。

心がこもって真面目な人間は小心で慎重に事を運ぶ。怖がる必要もないものを怖がるのは臆病者だが、怖がるべきものを怖がらないのは阿呆である。計算もなく、前に進むだけの無鉄砲な愚かさはない。臆病と評価されることさえ厭わない。

一過性のものは長続きしない。短兵急に事を急いでも、世の中は甘いものではない。分別は何よりも重要な徳である。「行動力」や「実行力」は何も持っていない、従って失う物がない連中における美德に過ぎない。当人はリスクを考えない行動を勇敢で行動力に溢れていると自慢気に考えるかもしれないが、能天気な人間は後始末をさせられる周りが迷惑する。

狂信者は好んで破滅に至る道を歩みたがるが、私はたとえ志半ばで倒れるとしても、成功の見込みのない暴挙に及び、容易く葬られるのは真っ平だった。甲子園球児ではないのだから、燃え尽きるつもりはないし、後日の試合のことも考えなくてはならない。「華々しく戦って美しく滅びよう」という軍国主義者の愚かしい自己陶醉は私には無縁だった。

【進路】高校卒業後は就職すると早くから決めていた。商業科を選んだのも、高校卒業後、すぐに就職しやすいようにという思いがあったためである。将来には今は見えない川が幾つもある。それを横切る手段をできるだけ多く残しておくことは賢明なことである。

また、自分が習ってきた算盤など得意なものを考えた時に、普通科よりも商業科のほうが合っている気がした。高校でも算盤を習うが、余裕でできるわけだから、やっというよかったです。

但し世間的には普通科より下に見られていたことは事実である。自分とは面識もない人が問題を起こしても、「また商業科かよ」と言われて気分悪い思いをしたことがあった。自分は何もしてないのに、何か自分まで悪く言われているようだった。学校という世界が益々嫌いになった。

早く卒業したくて仕方なかった。やる気がなくて、サボることばかり考えて、あまり充実感がなかった。文化祭の準備の時に、皆は一生懸命クラスの出し物の準備をしているのに、私はガラーンとなった教室に段ボールを敷いて寝ていた。皆がお祭り気分ですり上がっていても、私も一緒に盛り上がる気分にはなれなかった。

先に卒業して就職した先輩からは「絶対、学校に行っている時の方が楽しいよ。仕事しただしたら、今の学校のよさがわかるから」と言われたが、私は学校というところが苦手だったから、とにかく卒業したかった。パン屋でアルバイトしている経験からも、働く方が新鮮に思えた。

勉強は必ずしも嫌いではなかったが、学校生活は嫌であった。また、知的な好奇心はあっても学校の勉強は嫌いということもあった。例えば歴史は好きな科目だった。しかし歴史小説を読む限りは興味深い過去の世代の経験も知恵も生活の営みも、教え方によっては数式と同じように退屈で無味乾燥したものになってしまうのは驚くべきことだった。

また、教師や教科書は前方後円墳やピラミッドの建設を文明の偉業として位置付ける。しかし権力者の虚栄心に共感するよりも、賦役を課せられた人民の苦痛に思えを馳せるのが、民主主義社会における教育のあるべき姿ではないかと感じていた。

会社生活が楽しいものと考えるほど夢見てはいなかったが、給料を貰うためなら我慢することもできた。しかし、学校は何も帰ってこなかった。逆にこちらが授業料を払ってまで、尊敬できるかも分からない人にへいこらすのには耐えられなかった。

【科学の欺瞞】私が学校に馴染めなかったのは、個性を抑圧する集団主義・管理教育だけでなく、教育の内容自体にもあった。理数系の科目が嫌いだった。私の生活に全く役に立ちそうもないことを勉強するのは苦痛だった。加えて科学の欺瞞性が許せなかった。科学の信奉者は「証明されたから正しい」「実証されたから正しい」と言う。しかしその実は学界の権威が言っていることを正しいとしているに過ぎない。

科学の信奉者は「月面は真空であり、無風である」と言う。しかし「月面に行ったとさ

れるアメリカの宇宙飛行士の写真では星条旗がはためいているのは何故か」という質問には答えようとしな。そこから生じる「あの写真は、本当は月面ではなく、地球上のどこかで撮影されたものではないか」という疑問に対しては、根拠のない妄想と頭から否定する。

今でも科学技術の発展に尽くすというような欺瞞的なことを主張する輩には反発を覚える。未知のものや自然に対する謙虚さが欠落し、機械文明に対する信仰を盲信する。自分の知的好奇心を満足させることが、人類全体の幸福をもたらすと妄想する。科学技術の発展という誰も幸せにしない題目を盾に、研究や操業の続行を続けようとする。そういう輩がすることといえば、ロケットの打ち上げに連続して失敗したり、原発で事故を起こしたり、とろくでもない。技術進歩の影の部分として済ますわけにはいかない。技術力におぼれ、技術に凝るから、おかしな物を作ることになる。東京の地下鉄にサリンをまいた狂信者集団にも科学者や医学者がいて、人々を驚かせた事件もあった。

失敗を繰り返しても平然とし、「成功に至る関門の一つである」などと嘯く。都合の悪い事実を隠蔽・改竄することもしばしばである。研究や発明から重大な副作用が生じて「私の仕事は発明とその実用化まで。発明品の使い方を誤る人がいても、それは私の責任じゃない」と責任転嫁する。「こんなはずではなかった」という弁解やぼやきは科学者にとって都合のいい友人である。無責任極まりない連中のことを考えるだけで精神の沃野を汚水で汚される思いになる。

【占い】科学に反発する私は非科学的なものにのめりこんだ。世の中に科学的に明らかにされたことや、論理だけでは動いていない何かがあるのは確かである。科学者は科学的に証明できないものは存在しないと簡単に片付けてしまう。しかし科学者が使うことも理解することもできないからといって、存在しないことにはならない。

中でも占いはお気に入り、専門誌を定期購読するほどであった。信じているというよりも、楽しんでいてという方が近かった。こだわりだしたらとまらなくなる性格で、自分の好きなこととなると、知らず知らずのうちに情報を集めたり、あれこれ試してみたりして楽しみの幅を広げている。のめりこむと、もやもやとしたものが徐々に見えてくるようになった。

学校に残って友達とコックリさんをやって、先生に叱られたこともある。今でも部屋は風水に気をつけている。朝の占いでも、双子座の運勢がいいと、一日気分がいい。運が悪いと軽く凹む。おみくじも、結果に気持ちが左右される。

高校の古文か日本史かで平安貴族の物忌みの風習を習った後は、学校に行きたくない日は物忌みと称して欠席した。傍から見れば単なるサボりと変わらないかもしれないが、教養のある理由をつけることで、一人で優越感に浸っていた。

占いなどを大切に作る姿勢は歌手になる上で役に立つものだと思う。実際、芸能界は縁起を担ぐ世界である。成功した人ほど、才能や実力だけでここまで来たわけではないことを心得ている。私もこれにより何度も助けられたと信じている。

## 第七章 都会への脱出

【都会】私にとって福知山は田舎であった。お城とSL、筍とマツタケのイメージしかなかった。変化の少ない町だった。昨日と同じに積み重ねた今日を明日も同じように繰り返す。着実な時間だけが頑固に積み重ねられていた。それが嫌だったわけではない。誇りを持って自分の故郷とすることができる。

しかし早く大人になって、都会に脱出したいと思っていた。都会を文化の源と思っており、憧憬していた。昔から都会で流行っているものがあれば、すぐに真似をした。自分の生まれ育った街から離れ、都会に行きたい、そこで何かを成し遂げたい。色々な人や物と触れ合って、福知山では得られない刺激を経験したい。

就職先を決めたのも、会社が大阪にあるのが理由だった。とはいえ大阪に住んでからは、なんで東京の会社に就職しなかったのだろうと後悔することもあった。もっとも当時は大阪に住むこと自体が大冒険であり、東京までは考えられなかった。

家を出たいというのは、女手一つで育ててくれた母に申し訳ない気がしたが、願望の方が勝った。母も私の希望を笑顔で許してくれた。「今というのは今しかないから、やりたいことはやった方がいいから」と言ってくれた。娘の自立に際し、とびきりの笑顔で送り出したい、そんな気持ちが伝わった。

大阪は人間的であると同時に非人間的な都会だった。一人暮らしを始めた時は本当にウキウキした気分だった。一人暮らしの自由気ままさを満喫していた。最初は会社の寮に住んでいたが、その後、京橋のワンルームマンションに引っ越した。

寮を出たのは、プライバシーのなさや通勤時間がかかるのに辟易したためである。会社の寮なのに通勤時間二時間弱のところであり、通勤だけで疲れてしまった。たとえ家賃が高くても近くの方がよかった。

ところが、寝る前に、ふと故郷のことを思い出し、「お母さん」と叫んでしまう、そういうことがよく起こるようになった。福知山を思い出せそうな公園を雑誌で探し、行ってみることもあった。来る前は、まさか自分が望郷の念にかられるとは思わなかった。

これは東京に来て変わらなかった。念願の夢を叶えられる、という希望に満ち溢れた日々の中でも、故郷の風景が、ふと浮かぶことがある。東京に出てきたくて出てきたのに、どうして、こういう感情になるのか不思議だった。ただ、外に出ないと、故郷の良さは気付かないものとも思う。

【夢】会社ではソツなく仕事をしてきたつもりである。子どもの頃に算盤を習っており、計算は得意だったし、高校で習った簿記も活かした。同僚や上司にも恵まれた方だと思う。お世辞や営業スマイルも仕事として割り切る分には、我慢できた。

それでも歌手になりたいという気持ちは強く持ち続けており、夢を捨てきれない私を満

足させるものではなかった。しかも次第に単調な毎日に疑問を覚えるようになった。毎朝同じ時間に起きて会社に行き、何時に終わってという繰り返しの毎日で、メリハリのない生活であった。学生時代は時間割があり、曜日によって授業科目が異なったが、会社では同じ毎日の繰り返しで、曜日感覚さえ薄れていきそうだった。無限に続くかと思われる繰り返しが精神から弾性を奪っていった。

タイムカードを押して、先輩や上司には本音を隠してやり過ごす。給料が貰える分、学校よりはよかったが、勤務時間が終わるのをひたすら念じ、一人の部屋に帰ると猛烈な悲しみの感情にとらわれた。冷たい夜気が氷のように心に突き刺さる。ベッドの中で声を殺して泣いた。途端、時が止まったように辺りが静かになった。現実の虚しさからは一向に開放されなかった。

自分の実像と虚像の間で苦しんでいた。密かに自分に相応しいと思っていた賞賛や注目とは無縁の日々であった。現在の私は本当の姿ではなく、頭の中に描いた理想的な私为本当の私だと思い込むこともあった。私には社会主義国の五カ年計画も子供騙しに思えるくらい、しっかりと見通しが存在していた。しかし、いざ実行となるとさっぱりだった。自分でもがっかりするくらい弱気になってしまう。空想ばかり追いかけて、頬がこけ、頭もだめになっていくようだった。

【睡眠】一日の中で一番幸せを感じる時間は睡眠中である。だからできるだけ寝ていたい。完全に寝ている時は意識がないので幸せを感じようもない。半分寝て半分起きている状態、ウトウトしている状態がとても幸せである。

目が覚めて、それでも蒲団にくるまったまま動かず、何時の間にか意識が遠のき眠ってしまう、そんなサイクルを繰り返したい。蒲団の温もりの中に全身を深々と沈めていたい。寝ている時間は何もしない時間だからもったいないとの意見があるが、それを味わうのが快樂であり、快樂は長く味わいたい。

眠るのは好きならば早寝と思いがちかもしれないが、そうではなかった。確かに昔は早寝だった。しかし一日の仕事から疲れて帰り、その状態で寝てしまうことが嫌だった。仕事だけで一日が終わってしまう感じがしたためである。元々、寝つきがいい方ではない。そのため、眠りに落ちる前にベッドの中であれこれ考えてしまう。学生時代は逆にその空想の時間が楽しかった。だから早寝遅起きだった。

しかし就職してからは暗闇から日々の悩みや心配事が押し寄せ、押し潰されそうになった。追い詰められた手負いの獣のように、見えない影に脅えていた。あれこれ考えているうちに悔しくて全身の血が燃え上がったたり、焦る気持ちが空回りを始めたりすることもあ

る。肉体的には帰宅するとまずお風呂に入り、俗世の塵を洗い落とす。そうしなければ不潔感を拭い去ることができなかった。精神的にも同じような処理が必要だった。私にとって、それは音楽や小説、漫画、テレビ、ビデオ、ラジオだった。

現実逃避かもしれないが、数時間でも日々の生活以外のものに没頭する必要があった。そうすることで初めて暗闇を受け入れることができた。そのために夜更かしすることも多く、一層早起きできなくなる悪循環に陥っている。

【満員電車】当時は通勤時間二時間弱のところに住んでいて、満員電車に乗って通勤していた。それがどうしようもなく嫌であった。痛勤とはよく言ったものである。満員電車で物のように押し込められると、いかに自分と自分の周辺が矮小か、目を瞑ったままでも明確に分かる。他の人がよくこんな毎日に耐えられるのか不思議だった。特に腹立たしいのはラッシュの電車の中で人に寄りかかる人である。すごく重たくて死ぬかと思ったこともある。押し付けられた仕返しに、ハイヒールを打ち付けたこともあった。

会社で働くことは必ずしも嫌ではなかったが、満員電車に乗らなければならないと思うと毎朝憂鬱だった。朝、目覚ましが鳴ると「朝が来てしまったか」と溜息が出る。焼けた金属が胃の辺りに詰まっているようで、吐き気を伴う不快感と毎朝戦っていた。だから好きだけ寝ていられる休日には感謝していたし、休日が待ち遠しかった。

満員電車の中での沈黙と不動は憤怒の激しい爆発に先立つ集中と沈着であった。感覚を研ぎ澄ますと、毎日満員電車に詰め込まれる囚人の鬱積した怨念が痛いほど伝わってくる。満員電車はそこに居る者の生気を吸い取り、恐ろしい無意味さを満たそうと無駄な努力をしているかのような感じだった。満員電車の中では社会が限りなく醜く見えた。そして醜さを嘆き悲しむよりも、欲求を満たすことが先にあった。苦しいのだが、空腹を満たそうとすることしかできなかった。

オウム真理教の犯罪は許せないものだが、毎日、満員電車で人格を無視した家畜以下の扱いを受けていると、社会に対する敵意がどうしようもなく込み上げ、サリンを撒きたくなる気持ちも理解しにくくなった。

この国では一流大学を出ていい会社や官庁に就職した人がエリートとされているが、他人には羨ましがられても満員電車に詰め込まれる毎日を何年間も送らなければならないならば、とても惨めなエリートである。まさに社畜である。一方でこの国のエリートが自己の出世と保身のみを考え、市民社会に貢献するという意識が乏しいのも、毎日満員電車に詰め込まれていれば無理はないと思えてくる。

満員電車ですべての時間は苦痛だっただけでなく、無駄に思えた。効率的な時間の使い方として読書があるが、混雑のピーク時はそれも不可能だった。ここでも私を助けてくれたのは音楽である。心の中で好きな歌を歌い続けることで、多少はこの苦しみがから気をそらすことができた。時々集中するあまり、声を出してしまい、周囲から変に思われることもあったかもしれないが、構わなかった。

今は幸いなことに非人間的な満員電車に詰め込まれなくてすむ生活を送っている。それが自分の心と体を傷めていた長年のストレスを綺麗に解消してくれた。ゆっくり寝ることができ、毎日が快適である。ぐっすり眠ると、今日はどんな楽しい一日にしようか、と考

える意欲も湧いてくる。

【阪神淡路大震災】阪神淡路大震災の時は大阪にいて、心臓が飛び出るほどびっくりした。どういうわけか、関西は関東より、はるかに地震が少ないと思い込んでいたのだが、迷信に過ぎなかったみたいである。偶然であれ一定周期ごとであれ、地震は避けがたい自然の猛威である。常日頃より覚悟し、用心しなければならぬことを痛感させられた。

地震が起きたのは早朝で、揺れによって、目が覚めた。慌てて、テレビをつけたら、アナウンサーが淡路島で死者2人と saying いた。最初は、それだけしか確認が取れていなかったようである。情報も錯綜していて、各地の震度を書いた地図が出た時も、アナウンサーが「表には出ていませんが、神戸が震度7です」と述べた後で、「神戸が震度7と申し上げたのは、誤りでした」と訂正し、更に「申し訳ありません。やはり、神戸は震度7とのことです」と再訂正していた。まともに情報が取り寄せられない状態だったのだろう。

その後、段々状況が判明してきたが、他人の不幸は蜜の味とばかりに現地の被災者の心情を逆なでするような報道をして面白がっているマスメディアには腹が立ってしょうがなかった。記事の見出しを見るだけで舌打ちを禁じえなかった。

悲嘆にくれる遺族に「どんな気持ちですか」と暴力的なマイクを向ける。感情があるならば、悲しむ人間に無理やりマイクをつきつけるのはどんな気持ちであるかをまず自問するべきである。二〇〇四年一〇月の中越地震の際にはテレビ局の職員がボランティアと偽って取材を行うケースもあった。自分が被災者となったらどんな思いをするかを考えるべきだろう。

## 第八章 最後のチャンス

【反芻】就職して五年が経とうとしていた。二十三歳になっていた。夢を監獄に閉じ込め、現実の辛さを人並みに愚痴る大人になっていた。忙しさに身を任せると、考えることも難しくなる。日常の煩わしさや、スケジュール、人間関係、疲労感から、夢のことを考えるだけで切なくなった。夢を諦めようと思ったこともある。誰にでも境界はあり、それが夢を邪魔するのだろうか。思い込みが私を苦しめているのだろうか。このままでは体も心も腐っていくばかりのように思えた。

私の人生は、このまま終わっていくのか。中学高校の頃から、こんなものかなあと生きてきた。夢は砂漠の石碑さながら、摩滅していくものなのだろうか。それとも必死に目を凝らし、一生懸命探さなければ、拝むことのできない遥か彼方の星に過ぎないのだろうか。希望とも呼べない、儚い願いなのだろうか。

それでも心の奥には、絶対何かやるという気持ちが淡い期待とともに人一倍存在していた。私の中には未だ使ったことのないエネルギーと活かしたことのない才能、試されたことのない力が眠っていると信じていた。足りないのは自分を見つけるためのチャンスだけ

だった。それは児戯に等しい無邪気すぎる自負だったかもしれない。しかし見苦しくて、そして悲しいくらい純粋な祈りに近かったことも事実である。

やがては結婚して、主婦になるのだろうか。それはそれで幸せかもしれない。この思いが浮かんだ途端、眉間を一撃されたようなショックを受けた。違う、それでは終われない。そんなことを考えちゃダメ。私は心の中でパンチを繰り返した。

私にとって結婚は逃げでしかない。超越や悟ったふりで誤魔化したくなかった。それは悟りではなく、失望から生まれた狭い正しさの中に収まる愚劣さに過ぎない。そう思った時、久しぶりに胸のときめきを感じることができた。体の深奥では消えかけた火が再び燃え上がり始めた。

【オーディション番組】毎週日曜日の夜にはテレビでオーディション番組を観るのが習慣だった。日曜日の夜になると、楽しかった休日も終わり、明日から五日間また満員電車で通勤しなければならない。そう思うととても悲しくなった。嫌なことを考えたくないために、だらだらテレビを観ていた。オーディション番組は格好の慰めだった。

ある日、そのオーディション番組で新たな女性ヴォーカリストオーディションを開催するとの告知が発表された。そのオーディションは人気ロック歌手が審査員となり、福岡、大阪、東京、札幌の四大都市で開催される大規模なものだった。

当時の音楽シーンでは作曲能力のあるアーティストがプロデューサーとなり、楽曲を提供して歌手を売り込むやり方が流行っていた。プロデュースする側にとっては活動の幅を広げることになり、プロデュースされる側にとっては、某有名歌手がプロデュースしているということで、話題になりやすいというメリットがある。

この企画もそのプロデューサーブームに乗ったもので、プロデュースする対象者の選定からプロデューサー自らオーディションで行うという点が特徴だった。審査員となるロック歌手もシンガーソングライターで、特にギターを器用に弾き、楽譜なしでも一度耳にした曲なら弾きこなす天才的な閃きで頭角を現した人物である。

私は何気なくテレビを観ていたが、その告知を観た途端、ドキッとして、冷や汗が溢れ出した。頭の中で火花が散る。「あ、受けなきゃ、コレだ！」と直感的に思った。予感というよりも確信に近いものが私の中をうねるように通過していき、体のうちに力が漲るのを感じた。肩にかかる茶髪をなでているうちに指先に静電気が走った。興奮のあまり全身から放電しているのかもしれない。

とうとう私の出番が来た。これまで私の人生はゆっくりと流れてきたが、急流に近づきつつあることを実感した。この衝撃は忘れられない。思いつきで行動することはないが、直観をないがしろにすることはできない。この第六感にも類する本能こそ、私を救ってくれたものである。科学史に残る発見も実は直観で理論を生み出して、後のデータで実証を重ねたに過ぎないものも少なくない。

これまでも番組でオーディションの告知をしたことは何回もあった。しかし今回のよう

な直感が働いたことはなかったし、年齢制限や CD 持参という制約から諦めていた。CD 持参とは応募者が歌う歌のカラオケが入った CD を用意してくることを意味している。オーディション会場で CD のカラオケに合わせて歌を披露するためのものである。

何でもないことだが、当時は別の意味に解釈していた。普通のオーディションでは、歌を吹き込んだカセットテープを送ることがある。そこから自分の歌の入った CD を持参しなければならないと考えて、デビューもしていないのにそれは無理だと思ってしまった。今回のオーディション告知にはその CD 持参という言葉がなかった。これはアカペラで歌うことを意味し、考えようによってはより大変になるが、誤解していた私にとっては幸いだった。

私はテレビに表示された電話番号を急いで書き写した。詳しいことは電話で聞こうと思った。このオーディションでは書類選考は一切なく、直接、会場に行って、その場で選考される仕組みであることを知った。大阪のオーディション会場が家から近いことも分かった。当時一人暮らしをしていたワンルームマンションから徒歩で二〇分ほどの距離にあった。

これまでも大阪で開催されるオーディションはあったが、一口に大阪と言っても広い。私は大阪に住んで数年経つが、家と会社の往復が基本で土地勘は全くない。しかも方向音痴ときている。「大阪の某所」と言われても全くわからず、「面倒くさい」と思っていた。しかし今回は近所である。

「これはもしかしたらなんか縁があるのかもしれない」

占いを信じる私はこういう偶然も大事にする。会場が自宅から徒歩圏内にあるというだけで他の応募者に比べると有利である。実際、大阪会場の応募者には遥々中国地方から午前四時起床で来た人もいたらしい。長旅で疲れた人は、そうでない人に比べてハンデを負っていることは明白である。この点で私はラッキーである。但し運は早めにまとめて使い果たすこともあるので楽観はできない。

「さあ、どうしよう。でも、これは最初で最後のチャンスだな」

行くも行かないも自分の意思だから、もう行くしかない。悩みに悩んだ末、応募することにした。今まで迷った分、もう迷いたくなかった。冷静に考えることだけは忘れなかったが、もう少しだけ夢を目指して本気であがこうと思った。後悔に足首をつかまれたまま生きるより、失敗に終わるとしても挑戦せずにはいられなかった。

元々このために生まれたと信じている夢である。運命というものは多分、信じた人のものになるのだと思う。私の夢を知っているのは私だけである。だから自分を信じてみよう。そして自分の幸せをつかみたい。失いかけていたものを取り戻そう。

私は世間知らずかもしれない。世間を知っていれば、まだ会社勤めをしているか、結婚しているかのどちらかである。二十三歳でオーディションを受けたこと自体、人から見たら、これ以上なく奇異なことだろう。自分自身、よく不安と恥ずかしさで潰されなかったと感心するくらいである。ただ世の中、少くくは、私のような人と違った物の考え方

する人間がいてもいい。凹みそうになった時は、そう言って、自分を勇気付けている。

## 第九章 オーディション

【朝】光陰矢の如く、あっという間にオーディション当日になった。見えざる手が時計の針を超特急で進めているかのようだった。

その日は緊張から早くに目が覚めた。何故、突然意識がはっきりしたのか不思議に思うくらいだった。薄暗い天井が私を見下ろしていた。透明な早朝の空気がヒンヤリと部屋を満たしている。午前五時、いつもならば絶対眠っている時間帯である。炎のような力が心から四肢に伝わっていくかのように、すっと身を起こした。

生ぬるい水で顔を洗う。毎朝必ず起床後にする行動が洗顔である。これをしないままでは起きた気がしない。目やになどを洗い流し、肌に潤いを与える。今朝の湿度は決して低くはなかったが、外気に触れる肌に湿り気を与えると一層気分が引き立った。

洗い終わると、鏡の中の自分に力強い、愛情に満ちた微笑を投げかける。鏡の中の自分からも同じ微笑が返ってきた。鏡に映る寝起きの顔は聖者の心も溶かすかと思われるほど美しく、恥じらいに満ちていた。

今後どんなことがあろうとも忘れることのできない一日が、とうとうその幕を開けた。今日から私の人生は大きく変わるはずである。オーディションのことを考えると、興奮すると同時に不安も覚える。「私にはやってのける力も度胸もある」と自分に言い聞かせた。今ならばおぼろげな未来を覗き込める気さえしてきた。

窓を開けて、街を見下ろす。街はまだ眠っている。胸いっぱい空気を大きく吸い込む。昨日が一日中雨だったせいか、今朝は空気が澄みわたり気持ちがいい。澄んだ青白い空、誰もいない街、どこか遠くの鳥の声。明け方は、いつも淋しい。透明な空気に一人溶けて消えてしまいそうな頼りなさを感じる。

時間があるので、ゆっくりと朝食をとる。思えば朝食を食べること自体が久しぶりだ。平日は一秒でも長く蒲団にいて、起き上がったならそのまま会社に直行していた。休日は正午までずっと寝ていた。

まず冷たい野菜ジュースを飲んで胃を活性化する。よく冷えた液体を心行くまで味わい、ほっと一息つく。朝食はシチューとサラダである。かっこつけているが、昨晚の夕食の残りである。温めたシチューから立ちのぼる湯気が顔を優しくなでる。なでられたとあっては、食欲も燃えあがらずにはおれず、スプーンは勢い良く口へ運ばれる。一口ずつじっくりと味わい、栄養素が体の隅々にまで行き渡っていくのを感じとる。

食べ終わっても出発までにはまだ余裕がある。そこで植木に水をあげる。普段はやらない行為だが、今朝は何かをしていないと落ち着かなかった。鈍い光沢を放つブリキのジョウロの冷たい柄をキュッと握り、少し傾ける。パラパラパラ、という音とともに柔らかな土に染み込んでいく清潔そうな水。光の加減で虹がうっすら見える。

もう少し腰をかがめればもっとはっきり見えるかもしれない。しかし、さきほど手に塗った保湿クリームがべたつき、ジョウロの柄がヌルッと滑り落ちてしまいそうである。それが気になって虹どころではない。所詮、私にはハーブに水をやる上品な若奥様を演じることは無理である。私は唇をかみしめた。

「私は歌手になるしかない。歯を食いしばってでも、やらねばならない」  
この思いが私を高揚させた。

【会場への道のり】難攻不落の要塞に攻め込むような意気込みで家を出た。頭を振って軽い眩暈を取り除き、一瞬の躊躇の後、決心したように第一歩を踏み出す。オーディション会場に着くまでは何も考えられなかった。空っぽの頭には何一つ浮かんでこなかった。自分の足音が頭に木霊した。私が歩みを止めるとその音も途絶える。

歩きながら、しょっちゅう後ろを振り返った。誰かに見られているような感覚に襲われたためである。次第に振り向くのも怖くなった。

「知らない振りをしていれば、去ってしまうかもしれない」

私は自分にそう言い聞かせた。走り出したいが、前方にも闇が待っていた。それどころか途中で何度か建物の壁に手をつかざるを得なかった。そうしなければとても自分を支えられそうになかった。

「どうせ落ちる。受けても無駄」と、闇の声が耳元でねっとり囁き続けた。全ての光を吸い込み、成長を続けていく闇だった。闇の中にはあらゆる否定的な感情が渦巻いていた。隙さえあれば私の夢を粉々にして、この世界を私からもぎ取ろうとする。私の足にしがみつき、渦の奥に引きずり込もうとする。今にも四方八方から黒い触手が飛び出し、牙を向いて襲いかかるのではないかと思われた。闇の底には何が待っているのか、そこまではどれくらい深いのか、どのくらいの速度がつくのか、何一つわからないが、そんなことが起こるのを許すわけにはいかなかった。

「これは空耳よ」

私は自分に言い聞かせたが、耳元で囁く闇の声は増える一方だった。

「この闇に心を捕まれては駄目。これは錯覚よ。気持ちを集中しなさい」

私は自分を乗っ取ろうとする闇の人格を組み伏せようとした。

「止めてたまるか。私は歌手になるんや」

固い決意にもかかわらず、心は弱々しかった。激しく抵抗すればするほど、無力感がつのった。暗い潮のように込み上げてくる闇の声を打ち消そうと必死に考えようとすればするほど、却って思考の幅は狭まり、意識は遠のきそうになった。会場に向かおうとしているのか、自宅に帰ろうとしているのか、それすらも分からなくなった。

看板だかチラシだか忘れたが、「春夏冬 二升 五合」という文字が目にとまった。初めは意味が理解できず、歩きながらそればかりをずっと考えていた。数分後やっと「高い益々繁盛」だと閃いた。つまり、春夏冬は秋がないので、高い(あきない)である。二升は升

が二つで「ますます」、五合は一升の半分だから、半升（はんじょう）で繁盛になる。理解できる人は少ないだろうという優越感から思わず笑みがこぼれた。

とても軽やかな気分になって、何でもできる、オーディションも合格するという気持ちになれた。頭の中でこれまで練習してきた歌を何度も繰り返し、最後まで暗唱できたので、気分が一層楽になった。

【一次審査】オーディション会場では一六六一番で受け付けられた。ここが私にとって栄光への第一歩である。楽しみのない平凡な毎日から抜け出して夢を実現する場所である。しかしこれは過去を振り返った今だから言える言葉である。

会場は大勢の応募者で溢れていた。あまりにも混み合っていて騒々しいので、建物は外から見た時と比べて少し縮んだのではないかと思ったほどだった。しかも自分より若い子ばかりで、「私がここにいていいのだろうか。二十三歳でこんな勝負に出るのは、本当は間違いかもしれない」と思ってしまう。

当時はダンススクールに通っていた中学生や小学生のユニットがチャートの上位を占めていて、芸能界が低年齢化したかの感があった。このオーディションもその傾向を反映していて、十代の子ばかりであった。友達同士で応募した子も多いようで、おしゃべりに耳を傾けると、部活や宿題の話題が聞こえる。この場所でそのような話をするの方が、場違いだと考えたが、多勢に無勢で浮いているのは私の方だった。

ようやく自分が起こした行動の凄さを実感した。「自分にはこんな勇気があったんだ」と感心する一方で、気持ちが悪くなってしまった。深い淵のような恐怖が私を飲み込もうとする。そのまま得体の知れない恐怖に精神を蝕まれてしまい、どうしたらよいか、わからなくなってしまった。自分が光を持つ者に怯える亡霊のように思えた。

待ち時間は身をこわばらせながら、顔がゆがみそうになるのを必死でこらえた。肌はピリピリしていた。意思に反して体がブルブル震えだした。貧乏ゆすりかと思われるくらい、震えが止まらなかった。流氷の下に潜りこんでしまったようだった。ガクガクと震えながら、止めなければと自分に言い聞かせるほど、両足の震えが大きくなるばかりである。

大きく息を吸っては吐き出し、自分の中にあるドロドロした何かを吐き出そうとしたが、一向に楽にならない。せめてきちんと深呼吸できる余裕があれば、この漠然とした恐怖にも正面から立ち向かえただろう。

耳の中では血液がドクンドクンと脈打つ音が響く。頭は心臓の鼓動に合わせてズキズキ痛み、胃は締め付けられる。あまりに早く打つ心臓のせいで、目眩もする。血液は心臓に逆流し、顔からは血の気が引いていく。正常な流れが破壊され、本来なら穏やかな池であるべき場所に奇妙な逆流が起こり、非常に活発になっている。早鐘のように打つ鼓動よりも、はるかに遅い一秒が刻々と過ぎていく。

度を越した恐怖が生み出す幻覚の数も刻一刻と増えていった。目の前を血まみれの雲のように漂っていた。私は逃げ出したい気持ちと必死に戦っていた。「錯覚よ」と自分に言い

聞かせても錯覚は酷くなるばかりだ。

「どうかしているわ」

パチパチと自分の頬を叩き、自分を取り戻そうとした。

「もうすぐよ」

私は自分に言い聞かせた。

「もうすぐ、私の番が来る。そうすれば全てが決まる」

だが、この「もうすぐ」は果てしなく続いた。まるで自分の誕生までも遡り、二十三年間の人生を繰り返しているようだった。もっと待たされたら糸がプツンと切れて、大変な状態になっていたかもしれない。審査する部屋に通じる扉が、これからの人生に立ちふさがる障害物のように見えた。

遂に一六六一番が呼ばれた。私の番だ。私は立ち上がった。背中と太腿の筋肉がきつく束ねた鋼線のように張りつめている。恐らく今までの人生の中で最も重要な出来事が扉の先で待っている。ドアノブに手をかけると、何やらえたいの知れない恐怖に襟首を撫で回され、あわてて引っ込めてしまった。思い直し、勇気を振り絞って、再度ドアノブに手をかけ、扉を開ける。部屋に入ると三人の審査員が座っていた。一次審査の段階では審査員はロック歌手ではなく、テレビ局とプロダクションのスタッフがやることになっていた。

私は生まれて初めて空気を吸うように、深々と息をついた。

「一六六一番です。よろしくお願いします」

言葉が錆びた釘の如く喉につかえた。しかしその声は力強く、審査員達を驚かせたようだった。

私は一礼して歌い始めた。審査員とは三対一で向かあう形である。審査員の視線は当然、私に注がれる。私も審査員を見て歌わなければ不自然である。私の緊張は嫌がおうにも高まった。審査員と目が合うとゴクリと喉が鳴った。中央にいた審査員は、剣道の師範が腕の立つ相手に構えの姿勢を取れ、と促すような態度で挑発的な一瞥を投げてきた。

ああ、今こそ自分を発揮しなければならない。神経はギリギリまで研ぎ澄まされ、耳の中で血管がドクドクと大きな音を立て始めた。他の応募者のヒソヒソ話や足音が何倍にも聞こえる。内心の緊張を審査員に見咎められないか、心配だった。自分の心音が外に漏れていないか、そんな心配までしていた。実際、私が響きのよい美声の持ち主でなかったら、心臓の鼓動が審査員の耳に入ってしまったに違いない。

【審査結果】審査が終わった時は、ホッとしてへたり込みそうになった。額には汗が噴き出していた。今の今まで内臓が蛇のようにのたうっていたのに、急に腹の中が空っぽになった気がした。心臓が冷たくなり、膝から力を抜けていくのがわかった。そのまま床に座りこみそうになったが、ひたすら見栄から会場を出るまでは颯爽と歩いた。

何とか家までたどり着くと、みるみる力が失せていくのを感じた。台座の上で突風を受けた彫像のように、グラッとよろめき、ベッドに倒れこんだ。何日も休まずに走り続けた

ように体の芯まで疲れていた。そのまま心地よい眠りの神の沼地に沈み込んでしまった。

再び目が覚めた時には窓から日光が注ぎ込んでいた。ここ数週間で初めてとてもよく休めた気がした。伸びをすると体の節々が痛んだが、これは心豊かな活動がもたらした嬉しい痛みだ。一次審査は終わったが、まだ気を抜くところではない。結果発表がある。

発表はテレビでなされた。現地の審査員で応募者を絞り、ロック歌手がその中から次の段階に進める人を選ぶ仕組みである。ロック歌手の話によると、大阪会場はケバイだけの人が多く、歌の評価はイマイチだったという。その中で私は歌唱力を認められ、東京でのスタジオ選考に進むことができた。多少声量が細くて普通のカラオケのように聴こえてしまうのが難点だが、ボイストレーニングで克服できると言っていた。大阪会場から次の審査に進めることができたのは私と三重県から来た女子高生だけだった。

次の審査は東京で行われる。全国の会場から選抜された応募者がスタジオに集められ、観客の前で順番に歌っていく。そしてその模様がテレビで放送される。オーディションで歌うだけでも緊張するのに、観客やテレビカメラの前で歌わなければならないとなると筆舌を尽くしがたい。

「ああ、遂に私にもテレビで見えていた状況が起こる。ヤバいなあ」

これは現実の出来事ではないかもしれない。眩暈にも似た感覚だった。

オーディションのスタッフからは「東京ではテレビに映るので、一番いい格好で来てください」との連絡を受けた。その頃の私がテレビに出るため用の服を持っているわけがなかった。「これくらいしかないなあ...」と黒のタンクトップとミニスカートを着て行った。それは美しい体の線を隠すよりもむしろ強調するものであった。どうということのない格好がつまらなくもあり、安心するところもあった。

【反応】小さい頃から、歌手になりたいと強く思っていたが、その夢をこれまで誰にも一切言ったことがなかった。オーディションも自分の中では悩んだが、誰にも相談はしなかった。東京での選考が決まった頃に初めて家族や友人に話したので、皆、驚いていた。

母は私を温かく抱擁してくれた。何も言わなかったが、愛情のこもった母の眼差しが雄弁にその気持ちを語っていた。母の顔にはたくさんの皺があった。しかし、それは笑いと優しさと思いやりの皺ばかりだった。

妹には「すごいね。私にはとてもできない」と言われた。子どもの頃から、ずっと言わないで大切にしてきた夢だったから、とことんやろうと決意を新たにした。

オーディションへの応募は会社の人にも黙っていた。仕事をしながらこういうことをやっている自分自身がいいのか悪いのか判断ができなかったところがあったし、どうせ勝ち抜けないとも思っていた。テレビで結果発表されても、「観ている人はいないだろう」と高を括っていた。

しかし翌日、「あなた昨日テレビに出ていたね」と言われてしまった。「言わないでください、内緒にしておいてください」と答えたが、その日のうちに全社に話が広まってしまっ

た。後輩の子達も「どうするんですか、これから？」と心配してくれた。社長からもエレベータとかで会つと、私は「ああ！社長だ」と気まずいなと思っていたら、「何か今大変みたいだね。応援しているから頑張りなさい」と声をかけてくれた。

## 第一〇章 東京

【上京】二次審査の選考日が近づくにつれ、胸騒ぎのような恐怖感で悩まされ、仕事に集中できなかった。まったく自信が持てず、友達と行きつけの飲み屋で話し合う度に涙を流した。何か恐ろしい不運と恐怖が身に迫っているのではないかと不安で落ち着けなかった。色々と暗い想像を巡らし、心配の上に次々と不吉なことを積み重ねてしまった。しかも二十三歳で応募したが、誕生日を迎えて二十四になってしまった。

連日最高気温が二〇度を超え、汗ばむほどの晴天続きの中で二次審査を迎えた。太陽は朝から早くも、ぎらつく光を地上に投げつけてくる。今日も暑い夏の一日になりそうである。

行きの新幹線では、ぼんやり車窓の風景を眺めているか、寝ているか、弁当を食べるかしていた。弁当と飲み物は駅や車内で買うと高いので、予め買っておいたものを持ち込んだ。

弁当は味わうことができなかった。砂利を食べているような気分だった。弁当業者の名誉のために付言すると、弁当には問題はなかった。緊張感が私の味覚をおかしくしたのである。食欲はそれほどなかったが、喉は見捨てられたオアシスのように干上がっていた。こうなることを予想し、烏龍茶のペットボトルを複数本用意していたが、何杯飲んでも喉の渇きは満たされなかった。

本を持参したが、緊張から字を追うのが精一杯で頭には何も入らなかった。これからやろうとしていることに、勇気を振り絞るので精一杯だった。

【東京】「折角、大阪から来たのだから悔いのないように歌いきる」と自分に言い聞かせた。髪型も気合を入れた。普段はロングヘアを下ろしているものの、今日はアップにしてカワイイ感じにした。

この会場に来ているのは一時審査を突破できた者だけである。全国九九〇〇名の応募者から選抜された者達である。一時審査会場のような弾けた空気はどこにもなく、ピンと張りつめた熱気と緊張感だけが流れていた。緊張感が濃霧のように周囲を満たし、私を窒息させようとする。私はガチガチになっているのが人目にも分かるくらい固くなってしまった。顔は冷たくなり、体は痺れ、心は覚め、諦めが全身を浸していく。

高層階から直行で降りてきたエレベータが停止する寸前のような圧迫感、そして瞬間的にやってくる浮遊感が繰り返された。魂が体から抜け出て、浮き上がったり沈んだりする。自分では、もうずっと前に開き直っていると思っていたが、それは所詮、薄い皮膜程度の

自己暗示でしかないことを思い知らされた。

「早く家に帰って寝たい」と思ってしまう。ここが私の夢の墓場になるのだろうか。はるばる上京して散るなら、夢も本望だろうか。違う。私は急いで不吉な予感を打ち消した。

会場は満場の熱気で三度は温度を上げているように感じられた。私が登場した瞬間、会場は水を打ったように静まり返った。洞窟の静けさ、さもなければ森か墓地の静けさが周りを包む。周囲の空気が凍りつき、私自身も凍りついた。大勢の目が自分に注がれる。この中には審査員の視線も混じっているはずである。

無数の視線が見えざる矢となって私に突き刺さる。観客の眼差しがまるで稲妻の如く心の底まで突き通る気がした。解剖前に拡大鏡で観察されているような気分だった。観客は既に多くの応募者の顔を見てきただろう。しかし今の私の顔ほど青ざめた顔は初めてに違いない。

夢にまで見たステージなのに、第一印象は恐怖であった。背中をゾクゾクと虫が這っていくような感覚に襲われ、鳥肌が立った。腕を見ると刺のような粟粒がびっしりと浮かんでいた。数百、数千の恐怖の粒子が皮膚を引きつらせていた。

会場全体が丸ごと自分を責めているように感じられた。感情の波が雪崩のように押し寄せ、総がかりで私を押し潰そうとしている。毛細血管にコンクリートが流れ込み、全身を石化させてしまったように微動すらできなかった。ステージが今にも足元から崩れ落ちそう、立っているだけでも大変だった。このままでは砂嵐に翻弄される砂の一粒のように、自分を見失ってしまう。

考え抜いてきたはずの台詞は、地面に飛び散った水しぶきのようにいつの間にか四散してしまっていた。別に歌う前に台詞を言う必要はないのだが、少しでも他者との違いをアピールするために粋な台詞をあれこれ考えていた。しかしその準備も本番の緊張の前では徒労に終わりそうである。

「観客に媚びるのはよそう」

心の中で言い聞かせた。観客を魅了させ、心酔させてこそスターであり、アイドルである。慣れない台詞で点数稼ぎをするのではなく、純粹に歌で勝負しよう。時間はかかったが、呼吸と鼓動を整えた。心臓と肺の機能が次第に秩序を回復してくる。

手のひらは汗でびしょりしていた。滑らせて落とすことのないよう、マイクを強く握った。体が震えそうになる度に一層強く握り締めた。

この日のために選んだ歌は、自分がよくカラオケで歌っていた曲、ホンワカさせて癒してくれる曲である。今日まで何度も繰り返し、歌ってきた。歌い始めると、何故か心が落ち着いた。

自分の歌声が心の古い場所に食い込んで、たくさんの思いの下に埋まっている場所に浸透していく。それに伴い、体内を何か通過していく奇妙な感覚が全身に広がるのを感じた。今まで一度も味わったことのない、これからも忘れられそうにない感覚だった。それは神経に巣食う蜘蛛の巣を払い、もつれた回路を爽やかな風のように吹き抜けていく。

それによって筋肉がこれまでにないほど、くつろぐのがわかった。私は体で歌っていた。流れを作り、流れに乗り、流れを感じる。

余裕を取り戻しつつあるだけでなく、スポットライトを浴びることで体中に光の波が打ち寄せ、自分も光り輝き、生気が溢れ出した。私の光を反射して世界も輝いた。神々も天国も何も無い、純粹で清潔な白い光の世界を感じる事ができた。ここ以外に私の居場所はない。このまま私の歌が永遠に続けばいいのに。身も心も光の渦の中に投げ出した私は陶然としてその幸福に酔っていた。観客の歓声が暖かく快適な抱擁のように私を包み込んだ。

審査員からは「十八歳だったら即買いなのに」と評価された。審査員の言い方にも雰囲気にも特別なものが感じられた。年齢の話が出されたことは面白くなかったが、私は無言を保った。

しかし私の燃えるような目と思案に沈む態度は無言以上のものを審査員に伝えていた。邪魔者があればそれを持ち上げ、引きちぎり、遠くへ放り出す梃子を思わせるような鋭い目つきであった。全身の力を振り絞って止めの一撃を加えようとする闘士さながらであった。たとえ私が目を伏せていても、その顔からは誰にも譲らぬ堅い決意の熱い炎を読み取ることは可能だったろう。

そして私は最終候補者十一名に名を連ねることができた。一万人近くの応募者がたった十一人に絞られた。私はここまでやってきた。十一人の中では二十四才の私が突出して最年長である。次に年上なのは東京会場で応募した二十一歳のフリーターだった。

【最終選考】最終選考が近づくとつれ、神経が高ぶった。しかしこれまでの選考ほど、ひどくはなかった。最終選考が終われば全てが終わる。オーディションに応募すると決意して以来、気の抜けない状態がずっと続いていた。合格するにせよ、不合格になるにせよ、終わったことに対して、ホッとすることは間違いない。

そもそも最終選考まで残ること自体が恐ろしいほど嬉しいことだった。他人から評価される経験が乏しかった私には、自分の歌が他人に認められたことが純粹に嬉しかった。自分の歌に自分は満足しているが、それが他人にとってはどのくらい価値があるかは別問題である。それがオーディションという場で結果を出すことができた。

一方で最終選考に残ったのは、最年長の私がいることがテレビ的に面白いからではないかという疑念が頭から離れない。しかしだからといって、手を抜いてもいい風には返ってこない。いずれにせよ、まわりに気を使わずに思いっきりやろう、と考えた。

最終選考は歌だけでなく審査員との面接があった。面接があるとは事前に知らされておらず、当日初めて知った。しかも審査員はただのスタッフではなく、今をときめくロック歌手である。芸能人と会うということだけでもめったにないことだが、夢の実現がかかって入るところで会うことになるとうちは思いもよらなかった。

最終選考では黒のパンタロンスーツを着た。姿勢をよくすると、実に颯爽として見える。

髪形は普段のもの、つまり髪を下ろして臨んだ。そのせいか、ロック歌手から「さらに年を取ったな…。前回と印象が違う」と言われてしまった。しかも緊張感から表情が固くなっていたようである。後から自分の表情を見ると、苦勞も滲み出て、疲れた印象を与えていた。精神の苦しみが優しい顔立ちに気高い苦惱の表情を与えていた。

これらは選考では普通、マイナスイメージになるものである。それでも私は「これまで苦勞を重ねてきたから、表情もきつくなってしまう」と話した。とにかくよくしゃべった。他の応募者と比べて、言葉の量は三倍以上あったと思う。

自分がわかりきったことをしゃべっていると認識していたが、止まらなかった。自分のことをきちんと伝えなかった。おしゃべり、特に親しくない人とのおしゃべりが好きではない私は、自分がペラペラしゃべっていることに腹が立ったほどだが、不思議と恥ずかしいとは思わなかった。

私の苦勞は自分のやりたいことと現在していることのギャップからくるものである。他人と比べて格別大変な苦勞をしているわけではない。しかし苦勞の受け止め方が人と違うのである。物でも高性能な精密機械ほど、衝撃に弱く、壊れやすいが、人も同じである。才能のある人ほど繊細で傷つきやすい。小さい花は、ちょっと踏みつけられたくらいで、萎れてしまう。しかし、それは花が美しくないことを意味しない。アーティストは感受性が強くければ大成しない。焼野原から経済大国にしてしまうような前に進むことしかできない、鈍い人間では感性も発達しないだろう。

そして「今の生活から抜け出したい」という思いを隠すことなく正直に訴えた。気持ちが高ぶって「人生冒険したい」という大言まで飛び出した。私は暗い客席へ向けて叫ぶ女優のように叫んだ。自分の心の叫びを強調するために、両手を天井に伸ばすことまでした。

私の迫力と言葉の大胆さがロック歌手を驚かせたようである。後で聞いた話だが、羊の皮の下から狼が鋭い眼光をきらめかせたかの印象を受けたという。私の思いも「それはそれでいい」と納得してくれた。二人の間に理解が流れ、それが電流のように体を走ったような気がした。

受かりたい気持ちは誰よりも強く持っていたと思うし、オーディションでは自己の全てを表現できたと満足している。一つのことを成し遂げたという達成感で不思議なほど満たされていた。

## 第一一章 残念旅行

【残念会】達成感のあったオーディションであったが、合格する自信があるか、となると別である。最終選考まで進んだ中では最年長であったし、選考するのは私でなく審査員なのである。実力があるから合格、実力がないから不合格というものでも必ずしもない。

仮に自信があると虚勢を張ったところで、自信通りに物事が運ぶならば失敗する人は皆無だろう。それに物事は全て舞台裏で決められるということを知らないくらい愚かではな

い。公開性をウリにし、テレビで放送するようなオーディションであっても同じである。パンドラの箱ではないが、私にあったのは希望だけである。その希望も日一日と薄れていくものだった。

審査結果の発表は「追って沙汰する」型で、いつまで待てばいいのかも不明だった。テレビも結果は流すが、それはずっと後の話である。番組は後から編集したものなので、最終選考の来週には結果発表となるが、当事者にはそのような都合のよいスケジュールは与えられていない。

私は気持ちが落ち着かなくて、ひたすら結果発表を待つだけの生活には耐えられなかった。そこで残念会を兼ねた旅行を思い立った。結果を聞いて改めて落ち込むよりも、今のうちから心を切り替えられるようにしておこうと考えたのである。少なくとも私はオーディションでよくやったことは確かである。だから自分にご褒美をあげることは悪いことではないはずだった。

もし不合格の結果を聞いて改めて打ちのめされたとしても、その時は改めて旅行に行けばいいと思った。二度も残念旅行をするのは無駄遣いかもしいないが、とにかく今は結果をただ待つということができなかった。

【砂浜】太陽が激しく燃え盛る暑い夏の日だった。泳ぐと、海の底の砂に網目模様のチラチラした光と共に自分の泳いでいる影が映る。冷たい水の快い刺激で神経も程よく緊張し、心身ともに充実した気分だった。海の中で自分の肌を他の人の肌と比べたが、周りには誰一人、太刀打ちできる者はいなかった。自分の美しさにすっかり満足して上機嫌になった。

それでも泳ぎ疲れて浜に上がると、寂寥感に襲われた。熱で周囲の景色がゆらゆらと揺れているようだった。時間なんてものはここにはなかった。時間が流れると言うが、天動説の主張者が錯覚したのと同じく、流れているのは人間であって、時間は止まっているものなのかもしれない。

この旅行は残念会の位置付けで、自分の中では区切りをつけたはずだった。それでも区切りを付けられない自分がいた。私は秋の日暮れのような表情をしていたに違いない。おまけに雨まで降りそうだった。様々なことが頭に浮かび、何かを思うと途端にその何かが見える。オーディションの記憶がビデオを再生するように頭の中にくっきりと明滅していた。

自分の心に大きな穴ができてしまった。あるべきものがそこにはなかった。ぽっかりと口を開けた、やるせない穴は、当座は何物によってもふせげないはずであった。私はその穴に呑み込まれてしまい、空洞が私を動作ののろまな考えこむ女にしてしまった。

夜の支配を完全に退けた空は一片すら雲の存在を許さず、すさまじいほど底知れぬ青さが広がっている。宇宙の彼方で燃える太陽から放射された紫外線が、水平線を眺める私の目に突き刺さってきた。眩しくて仕方がなかった。まるで果てしなく広がる砂漠に裸で立

ちつくし、夕日に焼かれているようだった。だけど私にはどうでもよかった。

打ち寄せる波の音を聞きながら、鳥が水中に突っ込んでいくのを見た。波が海岸線に打ち寄せて、飛沫が上がった。砂浜の小石や海の塩分が履いてきたお気に入りの靴を傷つけても、靴の中をグジュグジュにさせながら旅館に歩いて帰ることになっても、どうでもよいという気がしていた。風が吹いた。カサカサと捨てられたビニール袋が舞い上がる。踏まないで欲しいのか、手にとって欲しいのか。ただそれだけだった。

最後のチャンスと思って受けたオーディションだったが、私の中で最後にすることはできなかった。ステージで歌った時の恍惚感は忘れられなかったし、今までの不満や不安を抱えた生活に戻るの嫌だった。だから大阪に戻ったら他にオーディションを探して、もう一回挑戦してみよう。ここまで自分をさらけ出したのだから。もうダメなのはわかっているが、やりたいのだからやってみよう。

## 第一二章 夢の実現

【発表】旅行中、携帯電話にオーディション事務局の人から東京に来るように連絡があり、慌てて上京した。オーディションを主催したテレビ局の受付で名前を言うと、三階の応接室に行くように言われた。

エレベータもあったが、三階程度ならば階段の方が早い。私は自分の穏やかな息遣いを耳にしながらゆっくりと階段を上がり始めた。エレベータは自動的に運んでくれるが、待たなければならない。一方、階段は自分の足を使うが、一步ずつでも自分のペースで進んでいける。それにエレベータは他人と乗り合わせると何となく緊張してしまう。だから階段の方が気楽で好きである。

三階に着いた時、疲労のためか、興奮のためか、私は息を切らせていた。応接室の場所はすぐにみつかった。室内に入ると、ロック歌手が座っていた。一輪の花も一枚の絵も飾っていない殺風景な部屋だった。軽い閉所恐怖症に襲われてしまいそうな無機的な空間だった。私はとぎこちなく室内に進んだ。まるで沼の中を進むような状態だった。緊張感から呼吸が重くなっていた。だが、この緊張には興奮が混じっている。期待と不安が否応なしに高まる。どういう態度で迎えられるのか、という瑣末な心配まで脳裏をよぎった。

ロック歌手は部屋に入ってきた私を見てヘッドホンを外した。茶色いサングラス越しの黒い目が幾分か戸惑いをこめて私の全身を見つめている。彼の不審がノースリーブの黒いワンピースから出ているこんがりとした日焼けした私の両腕に注がれていることは明白だった。

「日焼けした？」

向かいの席を勧めながらロック歌手が尋ねる。私は困ってしまった。私が今日ここに呼ばれたということは何か発表することがあるということだろう。そのために審査員やスタッフの方は今日まで色々と準備していた筈である。その間、私は海で日焼けしてきた。

私にとっては心の整理をするために必要な旅だったが、傍から見れば遊んでいるのと変わらない。私は自分がここにいることが相応しくない人間のように思えた。

答えに窮したため、座るという動作に忙しく、会話をする余裕がない振りをして、大袈裟に椅子を引いて着席した。

「日焼けしたでしょ？」

ロック歌手は私が座り終えたことを確認し、重ねて尋ねてきた。どうあっても答えを引き出すつもりらしい。私は覚悟を決めた。喉の渴いたものから水を遠ざけるように説明を先に延ばせば、それだけ相手の好奇心を掻き立てることをわきまえていた。

「もう終わったと思ったから、いいと思って…」

弱々しく私は答えた。口から出た言葉がそのまま床に転げ落ちるのではないかと思われる。この時の私は恥ずかしさで耳の付け根まで真っ赤になっていたかもしれない。

前置きの会話はそれで終了したようであった。ロック歌手はおもむろにサングラスを外す。直に見る眼差しは年老いた賢者を思わせた。春の青空のように清らかで深い眼差しだった。一息入れた後で、おもむろに本題に入った。その声の調子は、勅命でも伝えるかのようにはかた重々しかった。

「ご足労願ったのは他にもない。あなたがデビューすることが決まりました」

その声は生き物のように私を包み、耳の中で反響した。まるで小説の主人公になったみたい急展開である。最初は頭が真っ白になった。詰まっていた何かがスコーンと抜けた。体中に電気が走り、震えが生じた。鮮烈な風が私の体に吹き込み、胸に巣食っていた不安や絶望をことごとくなぎ払った。血液が喜びをのせて体内を循環し、それが脳裏で弾けるまで数秒を要した。屋内にもかかわらず、雲間にあった太陽がほんの一瞬顔を出し、そのぬくもりを背中に感じたようだった。

心の中で「本当にこんなことがあるんだ。夢は夢じゃないんだ」と叫んでいた。父がよく「人生には何が起こるかかわからない」と言っていたことを思い出した。もし私が敬虔な信仰を持っていたら神に我が身の幸運を感謝していただろう。しかし私の家庭はそれほど宗教的ではなかった。

他の誰も気が付かなかったとしても、この時、世界は確かに変わった。灰色の世界から薔薇色の世界に。何もかもが新しくなり、急速に広がっていった。かつてはその片鱗しか捉えられなかった未知の世界が目の前に大きく姿を見せ始めた。

世界の全てが光り輝き、何の矛盾もなく進んでいく。私と世界は調和していた。日はのぼり、また沈む。月は欠け、また必ず満ちる。そのような当たり前のことがはじめて素直に受け入れられるような気がした。

「二十四年間培ってきた何かを捨てなければならいかもしれない。それでもやりますか」

「捨てます」

私ははっきりとした口調で即答した。何の保証もない世界へ今までの自分を捨てて飛び込むことの意味は理解していた。それでも自分でもびっくりするぐらい、意外とすぐに切

り替えられた。「ここから私のやりたいことは始まる。いよいよ人生の正念場を迎えることができる」と実感できた。もう充分苦労してきているから、後は輝いていくだけだ。

帰途、道端では名前も知れない小さな花が咲いていた。素朴な薄紫の花弁がやけに美しく感じられた。太陽の光を吸い込んだ青草と大地の匂いが互いを確かめるように交じりあう。噴水は水しぶきを輝かせて、高々と上がっていた。

川面に落ちた光の細かなきらめきや、岸辺で揺れる木々の緑といった、日常の何気ない光景が、まるで永遠のように眺められる。新幹線から外の景色を眺めると、何でも無い田園の緑までがキラキラと輝いて私を祝福しているようだった。夜になれば満月が幽かに微笑んでいた。

私自身は光のトンネルをゆっくりとスキップしている気持ちだった。とめどなく、涙が出てきた。そして、その涙はものすごく気持ちのいいものであった。深々と空気を吸い込む度に新鮮な生気が血管を流れ、体中の細胞に広がる。これまで一度もちゃんと息を吸ったことがなかったような気がした。

今の私は何時にも増して穏やかで満足していた。そして誰よりも喜びに溢れていた。この時の気持ちは一生忘れないだろう。この後、どんなに惨めな事態に直面しても、この時のことを思い出せば、胸のすくような気持ちになれるだろう。

【退職】大阪に戻ってからは、それまで働いていた仕事を辞め、夢に向かって歩き出した。それまで会社のために働いていた身が、言い換えれば給料のために働いていた身が、自分のため、夢のために働ける充実感に心は弾みあがった。

会社生活を振り返ると充実感よりも虚しさが大きい。「立つ鳥跡を濁さず」の諺通りと言えれば聞こえがいいが、要するに何も残すものはなかった。組織の歯車という言葉があるが、私は歯車でさえなかった。

歯車ならば一個でも欠ければ一時的にせよ機械全体が止まるが、私がいてもいなくても会社は全く変わらなかつただろう。絶対に私でなければならぬという仕事はなかった。別に他の人ががしてもよかった。最初からいなかつたとしても、会社は今と同じように存在している筈である。

## 第一三章 デビュー

【デビュー】デビューが決まってからは、自分でも不思議なくらい、毎日がとても楽しく、毎日に表情が生き生きして若やいだ。まるで恋する乙女のようにすらあつた。周りからも表情が穏やかになった、柔和になったとよく言われる。もとより落ち着いている方だったが、ある種の貫禄さえ感じさせるようになった。

身体も健康で、夏バテなども全くない。早起き等、それまでは苦手だったことも、今は平気になった。安定した職を捨て、自ら選んだ不安定な生活は、精神的・肉体的にも素敵

な奇跡を起こしてくれた。

一方で我を忘れて浮かれるということはなかった。浮かれても足元も見つめることは忘れなかった。春が来たからといって飛び跳ねていると、薄氷を踏み割って水に落ちることもある。むしろ今まで感じたことのない深い安らぎがあった。これまで心に描いていた歌手像を実現するだけである。できることは全てやっていきたい。ゆっくりやっていきたい。

【デビュー曲】デビュー曲は信じられないほど純で感受性の強い思いやりのある女の子が主人公で、彼女の清潔で繊細な視線と心を歌っている。現実にはとてもいそうにない女性が出てくる。「自分もこんな経験したことあるなぁ」と思い出しながら作詞した。もってまわった難解な言葉遣いはなく、書いた本人が自分の言葉に酔っているといったところもない。自分の第一作目としては、すてきな作品ができたと思っている。

メロディーも覚えやすく、難しい技術を使わなければいけない部分も一切なくて、のびのびと歌える曲である。歌衣装も曲のコンセプトから、実際の年齢よりもかなり少女チックなものであった。二十四歳の私がこのような衣装を着ることに對してあれこれ言う人がいるかもしれないが、実際、街に出ると、こういう服装の女性はいる。

デビュー曲の作詞は私が強く希望して実現した。自分の言葉ならば、歌うときも感情を込めやすいためである。デビュー曲以降も自分の曲は自分で作詞している。作詞は難しく、簡単に「詞を作ります」なんて偉そうなことは言えないが、やればできるものである。自分に正直な作品を書きたい。

作詞中は形の定まらない思いが潮のように押し寄せる。後から後から言葉がこぼれてくる。五感を研ぎ澄ませ、心の動きに忠実に、全てを表現していきたい。歌っていて説得力があること、リアルであることを大切にしている。

しかし頭の中では素晴らしい詩が完成しているように思われるのに、実際に表現するとそれほどうまくいかないという苦しみに悶えることもある。そのため、頭の中でモヤモヤしていた思いが、不思議なくらいすんなり形にできた時の喜びは大きい。目の周りを覆っていた膜が剥げ落ちた気になる。

創作は自分の世界を創ることである。自分の想像力を具体的な形にすることは楽しい。作品が完成して自分の手元から離れる時は恋人に別れを告げるような寂しさを覚える。とはいえ私の場合は自分が歌うために書いている。こんな幸せなことはない。

【レコーディングと髪】最初のレコーディングでは実力を発揮できなかった。レコーディングは生まれて初めての体験であり、慣れないレコーディングブースの中では、そう簡単にうまく歌えるものではなかった。

何度歌ってもオーケーが出ない。しかし私には何が問題なのかわからなかった。しかも追い討ちをかけるように、マネージャーからは写真写りが悪いと言われ、ジャケット写真の撮り直しを命じられてしまった。

何で私が選ばれたのかわからなくなった。才能がないのではないかとも思った。

「私じゃなくても、他にもっといたでしょう……」

こんなことを考えてしまうほど、追い詰められていた。このままでは何も変わりそうにない。たとえレコーディングや撮影をやり直しても、今の私の状態では納得させることはできない。この最悪の状態を脱するためには何かしなければならない。何をしよう。そうだ、思い切って髪を切ろう。二十四年間短くしたことがなかった自らの髪を、バッサリと切り落とそう。これで気分が変われるならば未練はない。

私はロングヘアが好きで、子どもの頃からずっと髪を伸ばしていた。私は十分痩せているが、身長がそれほど高くなく、顔が丸顔なので、ぼっちゃり系に見られてしまう危険性がある。それを嫌ったために、ロングにして、スラっとしたイメージを出そうとしていた。実際、鏡に映ったロングヘアの私は丸顔という感じがしない。

茶髪に対して怖いという印象を少し持っていたが、就職してから髪を染めた。軽く染めただけだったが、自分が自分でない感じがした。気持ちが軽くなった気がする。自覚してはいなかったが、周りからは、黒髪の際は性格が暗いと思われていたようである。日本女性は黒髪が一番美しいという類の頭の固い人間による根拠のない妄言に自分も囚われていたのだと気付いて愕然とした。

「洋服が似合うようになったね」と言われてオシャレやメイクが楽しくなった。もっと髪を染めて金髪にしたい、ピアスもたくさん付けたいと思っていたが、従業員としての立場から、あまり派手にできなかった。

思い入れのあるロングヘアだったが、美容院に行ったらテンションが上がって、当初考えていた以上に短くした。これにより、心機一転が図られ、レコーディングや撮影も乗り切ることができた。ショートになって、重々しい雰囲気はなくなって若々しくなり、写真写りも良くなったと思う。以来、少しずつ伸ばしてセミロングで落ち着いたが、昔ほど長いことはない。

髪を短くしたのに合わせて髪の色も変えた。最初は茶髪でそれから金髪にした。髪の色を染めることが必ずしも人を美しく見せるとは決まっていないが、私の場合はやはり重々しい雰囲気が薄まって華やいだ感じになったと思う。田舎臭さも抜けたと思う。美しい金髪には鏡を見ながら惚れ惚れする。今にもパチパチと電光を放ちそうだ。

【レッスン】芸能界の体育会的な側面は、元々集団行動の苦手な私には苦痛だった。しかし芸能界は義務として通っていた学校ではなく、自分から進んで入った場所である。馴染めない点があっても、辛い思いをしても、我慢はできた。

ボイストレーニングやダンスレッスンも厳しかった。トレーナーや振付師が一流の方だったので、妥協を許さないという性格的な厳しさがあった。私はあまり器用な方ではなかったのも、かなり精神的負担に感じたこともあった。本番では絶対失敗してしまうと思って泣いたこともあった。しかし、そこで妥協してしまったら、いいものはできない。性格

的なキツさが生じるのも、やむを得ない。

二十四歳という年齢はこの世界では十分な大人のはずだが、歌手としては卵の殻に片足を突っ込んだままの新米だった。十代の子と一緒にレッスンすることもあるが、彼女達の方がはるかに熟練していた。それもそのはずである。私が一人で歌ったり、カラオケで歌ったりする以外、他に何もしていなかった時に、彼女達はレッスンしていた。彼女達の親は「勉強しろ」「塾に行け」と五月蠅く言う代わりに、レッスンに励ませ、送り迎えまでしてくれる。

見た感じ普通の中高生だった。どこにでもいそうな子供に見えた。この普通の女の子達が歌い出すと普通ではなくなる。私は彼女達についていくのでいっぱい、辛かった。自分が遅れてきた存在であることを否応なしに痛感させられた。皆が既にやってきたことをこれから覚えていかなければならなかった。

遅れを取り戻すには月並みだが、人一倍練習するしかない。私は猛練習した。こんなに真剣になったのは生まれて初めてかもしれない。厳しい練習も夢の実現に直結すると考えれば熱が入った。練習を苦と思うより、一日中、音楽で没頭できる環境が嬉しかった。

【ライブ】ライブは歌手にとって自己の全てを表現できる機会である。一番楽しい仕事である。ステージは二つの世界の接点である。現実の虚構が結婚して、感動という子供を産み出す。

テレビは誰が見ているかわからない。私の歌に興味があるからではなく、時間つぶしのために偶々見ているだけかもしれない。しかしライブは違う。観客は皆、私の歌を聴くためにわざわざやってきた方々である。

テレビ出演を拒否し、ライブ中心に活動する歌手が少ないのも当然のことである。私自身は、自分にそれほど興味がない層に対してもプロモーションを行う必要性を感じているので、テレビ出演を拒否することはないが、やはり楽しいのはライブである。

但し、ライブの観客にも例外はある。業界の常としてマスメディア席や関係者席なるもの用意されている。チケット取得の苦勞もしていない、その席の連中が会場の一体感を損なっているのは事実である。東京より地方の公演の方が盛り上がることが多いのも、そのような席がほとんどないためであろう。何れにせよ、世の常として例外はあるものも、それはごく一部であり、より多くのファンがチケットを取りやすくするためにできるだけ減らそうと努めている。

加えてテレビはたくさんの人が観ているとしても、リアクションが返ってこないのも実感がわかない。業界人は視聴率を尺度にするが、歌手の立場では出来の良さと視聴率に相関関係は感じられない。この点、ライブは観客の生の反応が返ってくるから面白い。

CDを聞いただけでは、「ちょっとダサイ」と思わせてしまう曲もある。しかしライブで堂々と、それでいて実ののびのびと歌えば「一〇〇パーセント真剣だよ」と伝えることができる。肌から滴る汗がレーザーを濡らして黒々と輝き、汗の一滴毎に観客の熱狂も高まる。

そして何だかバカみたいなリフを自信満々かつ大音量で繰り返せば、全身の血が溶解した銅のように煮えたぎっていく。ダサイという解釈は破壊され、後は音そのものの響きが何処とも知れぬ場所で不気味に膨張しはじめる。

逆もまた真でテレビでは楽しませることができても、ライブで聴かせると、それほどでもない曲もある。テレビと同じことをステージでやっても面白くない。ライブでしかできないことがある。歌うならフルコーラスで聞きたい曲もある。中途半端にやるくらいならば、やらない方がましと思えた。

今でも他の歌手の公演にはよく行かせてもらうが、デビューする前は専ら観客の側だった。中学生の頃から、よくライブに行った。とても楽しかった。ステージで歌って踊る歌手と一緒に踊った。歌手の暖かさ、優しさ、一生懸命さが充分伝わってきた。自分もステージに立ち、スポットライトを浴びて歌いたいという思いは募るばかりであった。

友達と一緒にいくこともあったが、ある時、一緒に行った友達の感想が「椅子が堅くて腰が痛かった」というものだった。以来、その友達とは一緒に行かないことにしている。

学校が休みの日に行くことが多かったが、学校を勝手に休んでいくこともあった。平日に行くライブは休日のそれとは雰囲気の違い、より深く楽しめた。ライブで好きなアーティストの歌を聴く楽しみを経験しているから、今度は自分が歌う側になっても楽しませることができると思う。

【生放送】生放送では本番が始まる前から「今日は何を話そう」、本番中はモニターを見ながら「あ、映っている！」と終始緊張しっぱなしである。精神が高揚する一方で、恐怖も深まる。心臓が飛び出しそうなほど早く打ち、それに呼応して目まぐるしく思いが駆け巡る。

呼吸を整え、気持ちを落ち着かせようとするが、どれだけ深呼吸を試しても、胸の鼓動は少しも楽にならない。緊張という名前の背後霊に取り付かれたかのようなのである。逆に不自然に深呼吸を繰り返すと自分で緊張していることを認めることになって、余計プレッシャーがかかるため、最近は無理にしないようにしている。

生放送では編集が効かないため、うっかりとんでもないことを口走れない。生放送で、やってしまったら、スタッフやスポンサーの皆さんに多大な迷惑をかけることになる。そして、それが自分に跳ね返ってくるのが、一番きつい。但し、それを気にしすぎて、生放送では固くなりすぎているという指摘を受けたこともあり、今では意識しすぎないように心がけている。逆に油断し過ぎると、つまならそうな表情や退屈している表情が映されてしまう。私はすぐ表情に出るので、集中力を保つように気をつけている。

一方で時々は訳の分からない行動をして、番組の進行をめちゃくちゃにしたいとの衝動に駆られることがある。いい気持ちで酔っ払っている連中を見ると水をぶっ掛けてやりたくなる悪い癖が出てくる。お笑い上がりで司会者気取り MC の下らない進行を根こそぎ覆した時など絶頂すら覚える。

【スタッフ】事務所のスタッフとはあまり仲良くしていない。スタッフとアーティストは、ある意味、対立する存在である。アーティストは、まず自分自身の利益を考える。それに対し、スタッフは会社の利益を考えるべきものである。実際のスタッフの全てがそうとは限らないし、そうであるならば着服も使い込みも交際費での飲み食いも起こらないはずであるが、あるべきスタッフとは会社の利益に貢献するものでなければならない。

そうなると、アーティストとスタッフの間には当然軋轢が生じる。だから、あまり仲良しこよしになることはあり得ない。考えすぎかもしれないが、用心しておく方がよい。そして仲良しでないことが悪いわけでない。緊張関係があるからこそ、いい作品を制作できると信じている。和気藹々でいることが生産性を高くするわけでもない。同僚の未熟やミスに対する寛容さがより大きな危険を招く例は多い。逆に、友達とずっと仲良しでいたかったら、一緒に仕事をしない方がいい。これは結構大事である。

私が大阪に出て大親友となった人も仕事とは全く関係のない自動車教習所で一緒だった人である。今でもその人とは大親友で大阪に行った時は遊びに行く。友達にも仕事の話・相談は一切しない。そもそも大事なことは誰かに意見を求めても結局は自分で決めるしかないと思っている。たとえそのとき仕事上で悩みがあったとしても、友達という時間は忘れることにしている。

## 第一四章 生活

【ケア】私の肌は研磨された大理石を思わせるほど綺麗で、光が滲みでてくるように思えるほどである。ほとんど手入れをしなくてもスベスベで、産毛もほとんど生えてない綺麗な赤ちゃん肌である。化粧によって美しさを強調する必要もない。この点は親に感謝している。友達から「羨ましい」と言われることも多い。「そんなことないよ」と言いつつも内心鼻高々である。肌の丈夫さに胡座をかいて二十歳を過ぎても海で日焼けする一方で、ケアにはあまり気を使っていない。

ネイルアートや髪をいじるのは創造につながるが、肌のお手入れは保持することである。画期的な変化がないので面白味に欠ける。とはいえ、そのような地味な活動が大切である。保持で済むうちに手を打てるものは打っておきたい。自分の年齢や肌質にあった乳液を、寝る前にきちんと塗ることが大切である。

髪の毛は染め過ぎで頭皮を痛め、ロングヘアに戻しにくい一因となっている。染めるのを止めるつもりはないが、髪の毛の痛みは体の疲れの悲鳴かもしれない。まずは食生活をしっかりと整え、生活のリズムを取り戻したい。

【散策】上京したばかりの頃は、オフの日に、JR や地下鉄の一日券で探索をよくした。駅を降りたら、目の前に自分のポスターがバーンと貼られていて、熱いものが込み上げて

きたのを今でも鮮明に覚えている。

ブラブラと色んなところへ散歩することは昔から好きである。のんびりと歴史のある場所をたんのうしたい。まだ、それほど顔を知られていなかったから、人が集まることもなかった。福知山にいた頃から寺社巡りが好きだったため、浅草にはよく行った。

歩きに歩いて、ある作家の資料館にたどり着いた。この人は、二十四歳で亡くなったのに、凄い作品を残している。それに比べ、自分のここまでの人生は何なのだろう。今は、少しはファンの皆さんに支持してもらえているが、これから先どれだけのことができるか、と考え込んでしまった。

歩きながら電信柱などにある地名を見るのも楽しい。しかし最近では悲しいことに「十二社」(じゅうにそう)、「御徒町」「鶯谷」といった古くからの情緒ある名前が消されてしまっているようである。合併により地名が消えるケースも多い。

十二社は西新宿というシンプルな名前になってしまい、古くからの住民はガッカリしたという。大都会なので、他所の人にも所在地を分かりやすくするというのが名目のようだが、「味気のない名前」という意見が出るのも無理はない。地元の人の中には「田舎から来た役人がつまらんことして」と怒っている人もいる。「百人町」の人らは、改称反対運動を起こして、名前を守った。

こういう人の気持ちはよく分かる。長年その土地に住んでいる人にとって地名は誇りであり、地元の人にとっては、寂しいものと思う。私も地元の福知山が消えるのは、絶対に嫌である。

【マスメディア】マスメディアとは関係浅からぬ仕事に就くことになったが、同業のほとんどの方と同じくマスメディアは嫌いである。ジャーナリストと会う時は、不潔なものを見た時の不快感を隠すのに苦労する。レポーターが近寄って来るだけで空気が銅臭を帯びたものを感じられる。

撮影の時も撮影者から「元気な表情で」とリクエストされても、中々テンションが上がらない。人間味の感じられない対応をされるよりは喧嘩をした方がましという気持ちになってくる。

彼らは表現の自由を掲げるが、自分の利益を掻き集め、それを守るために恥も外聞もなく戦っているに過ぎない。戦前のジャーナリズムは政府の宣伝機関に過ぎず、戦後のジャーナリズムは営利目的の企業でしかない。企業は時として利益のためならモラルを無視するものだが、マスメディアも多くの企業と同じく株式会社の形態を採っていることを忘れてはならない。

自分は安全な場所に身を置いて、一方的に相手を傷つけて楽しむ。記事のためなら他人がどんな不幸に落ちようと構わない。むしろ他人の不幸は蜜の味とばかりに新たな飯の種類にする。ごく些細なことにも尾鰭をつけ、大きな事件は意地悪く誇張して聞かせ、できるだけ効果を上げようと必死である。

しかし他人に知られたくない自分の秘密は自分のみが知っていることに誇りを持ち、それを守ろうとするのは、完全に正しいことである。多くの人を知りたいという理由で報道が許されるならば、多くの人を殺したいと思ったならば殺人も許容されることになってしまう。

歌手として有名になりたいという気持ちは皆無ではない。しかしマスメディアの報道はその場限りのニュースに過ぎない。多くの人に知られて忘れられるよりも、たった一人の人によくわかってもらった方がずっといい。その場限りのうそ臭い賞賛とは無縁でいたいし、単なる好奇心の対象になるのは不愉快である。

基本的にマスメディアは羽振りがいい人を嫉む。正当であろうと不正であろうと、他人が利益を得るのを傍観するのが嫌なのである。色々言っても、結局揚げ足とって困らせるのが目的である。暇だったり、何かに鬱屈したりしていると他人にチョッカイ出したくなるのと同じである。

大きな事件があり、ある人が逮捕され、それが報道された。このような時、多くの方は、「コイツが犯人か」と思ってしまう。私も、正直そう思ってしまう。しかし、その人が、長い時間を費やした挙句、無罪を勝ち取るということも、かなり起こっている。だからたとえ大々的に報道されていても、それが真実とは言い切れない。多くの方がマスメディアの報道姿勢を、あれだけ批判しながら、このような時だけ、何の検証もなく、100%信じてしまうのは、何故だろう。

マスメディアの執拗な攻撃対象になっている人が、インターネットで自分の Web サイトを反論しているのを見て、「ああ、いい時代になった」と心底感じた。これまでは、このような場合、反論する機会もなく、マスメディアに総攻撃を受け、それを読んだ読者から白い目で見られることを甘んじて受けなければならなかった。そして名誉回復の機会もなく、永遠に社会から抹殺されてしまう。

しかしインターネットの発達により、不完全ながらも、反論する機会が持てるようになった。つまり、マスメディアが実質的に独占していた言論の自由を一般市民もやっと享受することができるようになった。まだまだ不完全ではあるものの、相当な前進であることは間違いない。その意味で、ああ日本も、ようやく自由主義国家としての体を為してきた、という感慨がある。

中学生の時に公民で言論の自由を習った時、「そんなもん、絵に描いた餅やないの！」と凄く不愉快に思ったが、やっと、小さいながらも、本当の餅になった。このような物の見方をすることを「世間知らず」と言うのなら、私は生涯「世間知らず」でありたいと思う。そのような世間を知っていることに何の意味もない。

【関西人】私は関西出身だが、関西弁はあまり話さない。特にラジオやテレビでは話さない。マクドナルドをマクドと略すこともない。マクドナルドが自らの略称としているマックを使っている。東京で長く生活すれば標準語の影響も当然受ける。

関西人には、関西人らしくして欲しいという人もいるかもしれない。しかし関西人である前に一個人であるわけで、個人としての個性があるのは当然である。「関西人は、関西人らしくあらねばならない」というのは「女性は女性らしくあらねばならない」というのと同様、没个性的で全体主義の発想である。例えば関東人みたいな関西人や、逆に関西人みたいな関東人がいてもいい。マニュアル通りに振舞う必要はない。自分にあったスタイルをとればいい。

そもそも関西と一緒にたにする発想自体気に入らない。私は東京に同化しようとする気は全くない。しかし大阪にも同化していない。私にとっては大阪も東京も等距離という感覚である。居住地を福知山から大阪、東京と移すうちに気が付いたことであるが、自分は福知山の人間であって、大阪でも東京でも余所者である。

私は昔から個性を無視して枠にはめようとする見方が嫌いである。17歳の少年による犯罪があると、センセーショナルに煽るために、わざわざ「17歳の犯罪」と記述する。昔から、少年の凶悪犯罪は存在する。上の世代の人が、こういう事件があると、すぐ「教育のせい」と言うのには正直、不愉快な感情がある。

## 第一五章 成功

【成功】男も女も年齢も関係ないこの世界は、常に戦いの場でもあると思う。戦いは結果が全てであって、努力の過程を見るものではない。「一生懸命」や「がんばる」というようなつまらないことは言いたくない。一生懸命やってようがいい加減にやってようが、面白いものは面白いし面白くないものは面白くない。

そしてプロの歌手としてここまで続けることができたのは、成功だと自負している。自分に誇りを持っている。歌手を続けることができたのは多くの人に支持されたからである。多くの人に支持される、これだけでプロとしては成功である。「学芸会の延長に過ぎない」と批判する人もいるかもしれない。しかし何であろうと、支持されてしまえば、プロとしては勝ちである。

私みたいなものが支持されるという現実が、日本の音楽シーンをダメにしている、というご高説を振りかざす方も稀にいることは知っているが、それは次元の違う話である。その種のご高説を全否定するつもりはないが、それはあくまでその人の私見であり、普遍の原理とはかけ離れたものと思う。そもそも芸の評価に、普遍の真理などは存在しない。

仮にそれが同時に多数のアンチを生み出したとしても、それは価値を下げるものではない。無論、倫理的に許されないようなことをしているならば別論である。むしろ有名になればなるほど批判のボルテージも上がることが多い。アンチは増えることはあっても、減ることはない。

いかに支持されているアーティストであっても、アンチや無関心は存在する。いないということは、全員が賛成ということになり、思考停止状態である。万人の心が一つで感じ

方も一つでは気色悪いだけでなく、恐ろしくてかなわない。否定する人達は放置し、応援してくれる人を喜ばせたい。批判者も他人の揚げ足取りに費やしていないで、もっと生産的なことをすればいいと思う。

【三十歳】二十四歳でデビューという女性歌手としては遅咲きな方だったため、デビュー当時から年齢の話題を振られることが多かった。仲間やライバルはほとんどが十代であり、私は常に年齢の話題にさらされていた。そのため、私にとって年齢はセンシティブな話題なのである。

逆に言えば、私を怒らせるのは簡単である。年齢の話をするだけでいいだけである。その反応に合わせたにわざわざ年齢の話題が持ち出されることも少なくない。あわせて「恋人は？」、「ご結婚は？」という音楽とは全く関係ない無神経な質問にも耐えなければならなかった。それが嫌でオフの日はアルコール漬けになったこともある。

三十歳を迎えて、「ああ三十か」という気持ちの反面、この歳までよくやって来られたという感慨がある。三十歳になる直前は、「このまま三十代になって大丈夫かなあ」と不安だったが、いざなってみると楽になった。

二四歳でこの世界に入って六年。小学一年生だった子が中学に入るまで続けられたことになる。六年は、この仕事を辞めていたとしてもおかしくない年月と思う。会社員生活でさえ、これほど続けてはいない。この六年の間に私が契約している事務所からも新人がデビューしていき、私にも大勢の後輩ができた。私と同時期にデビューした人の引退を見送ったこともある。

デビュー当初は先行き不透明だった。売れるようになって、一発屋の運命を辿るのではないかと思うこともあった。薄氷の上に片足で立っているような気持ちであった。この日々をいつか失う時が来るだろう、と想像してビクビクしていた夜もあった。

今の状況がずっと続くとは思えないし、長い人生の中の一瞬に過ぎないとも思う。必死にやってはいたことは確かだが、一方でどこか醒めていた面もあった。「歌手一年総理二年の使い捨て」という言葉が頭から離れなかった。

もう歩けない、そう言いながら歩いてきた。休み休み、それでも何時の間にかここまで歩いてこられた。とはいえ、まだ六年。これからも、厳しいサバイバルレースに挑まなければならない身である。事務所には前々から、ずっと仕事を続けていきたい、と伝えてある。どの程度続けられるにせよ、人生の白いキャンパスには自分の筆で描いていかなければならない。そして既に夢の基盤は整っている。気を引き締めて行きたい。

【歌える喜び】歌えることが自然に嬉しい。歌を歌えていればそれで幸せである。幸せ過ぎると時に幸せの意味を失いがちになる。幸福を侮ると、落とし穴の口が開く。歌が今の私の原点であり、基盤であり、核である。歌が嫌と思った時は、この仕事を止める時だと思う。

これまで決して楽しいことばかりではなかった。本当は辛いのに「何で私、笑っているんだろう」と思うこともあった。皆に笑顔で応えるだけでも、嫌な汗が噴出し、呼吸が苦しくなることもあった。光の中を歩くと決めたら、行きたくない場所に連れて行かれることもある。しかし、上り坂ばかりだろうと、この夢を選んだのは私である。避けるわけにはいかないし、そういうことがないと今がない。

辞めようという考えがよぎったことも一度や二度ではないが、もったいなくて、そう簡単に中途半端に投げ出すわけにはいかない。一度辞めたらなかなか戻ってこれない世界である。当時悩んでいたことが、今クリアになっていたらそれはすごくいいことであり、何よりも今歌えていることが一番の幸せである。

他の仕事もやらせてもらって、色々ないい経験をさせてもらっているが、その分、難しさもわかった。例えば演技は演じる役柄を理解しなければならない。どんなに非日常的な役でも、「その人にとっては、それが自然」と観客が思えるように演じなければならない。

しかし私はどんな性格、どんな境遇の人物を演じるかというよりも、ヒロインになって拍手喝さいを浴びたいという意識がどうしても先行してしまう。その結果、場面一つ一つの華麗さに酔って全体の構成を置き去りにしてしまう。

歌以外の仕事をやらせていただけるのはすごくありがたいし、やりたいことでもあるが、やはりずっと歌を歌っていきたいという気持ち大きい。「器用だね」と言われるよりも、「色々な歌を歌えるね」と言われるようになりたい。もっともっと上手く自分の心情を込めて歌っていきたい。そこを忘れずにやっていきたい。